

平成 22 年度 文部科学省委託事業

平成 22 年度 ICT の活用による生涯学習支援事業

(国内における実証的調査研究)

一人ひとりの e ポートフォリオが社会に生かされる
学習基盤の構築に関する調査研究

調査研究報告書

平成 23 年 3 月

富山インターネット市民塾推進協議会
地域学習パスポート研究協議会

はじめに

中央教育審議会（2008年2月）の答申「新しい時代を切り開く生涯学習の振興方策について 知の循環型社会の構築を目指して」のなかで、多様な学習機会の提供及び再チャレンジが可能な学習環境の整備と、これを産学官が協力して支援する生涯学習推進体制「生涯学習プラットフォーム」の構築が強く求められている。国民の経済的な格差の問題や非正規雇用の増加、ニート・フリーター問題など、もはや学校教育だけでは解決が難しい問題が山積してきている。

従来、初等中等教育から高等教育を経て、それなりの学歴を付ければ、学歴に見合った職業につくことができた。しかし、昨今の状況は異なる。高等教育を受けたからと言って必ずしもそれなりの安定した生活が保証されなくなってきた。大企業に就職したからと言って、生涯安定した生活が送れる保証も少なくなってきた。社会の不確実性が増してきたのだ。このような中で、各個人が社会の変化に応じ、生涯にわたり職業能力や就業能力（エンプロイアビリティ）を持ち、社会生活を営んでいく上で必要な知識・技能等を習得・更新し、それぞれの持つ資質や能力をたえず伸長することが求められてきている。自己責任での行動が強く求められる時代になってきた。

このような時代背景の中で、富山インターネット市民塾推進協議会では、インターネットを活用した学びと交流の学習基盤を構築し、年間約100の学習講座を運用してきた。そこでは、多数の市民が学習をベースに交流を深め、地域参画を進める中で、学びを通じた地域コミュニティの活性化に取り組んでいる。中には、若者の自立を支援するeラーニング講座や様々な仕事を紹介するe手仕事図鑑など、多様な学びと自立を支援する活動も展開してきている。

情報化、国際化の大波のもと、特に技術の進展等が著しい中で、知識や技能等は陳腐化しないよう常に更新する必要がある。また、他者との関係を築く力など複雑な社会を生き抜くための総合的な力は、学校教育の期間と場のみならず、ライフステージに応じて多様な場所や方法での学習や活動で育まれるものである。このように生涯を通じた学びと就労を考えると、折々の学びの記録が自己のアイデンティを示すものになると同時に、その記録の振り返りで、自らを次のステップに踏み出すエネルギーにもなる。このような意味で、近年、学習や活動の記録としてのポートフォリオ、特に電子的媒体でのeポートフォリオの可能性が注目されてきている。

そこで、今年度「一人ひとりのeポートフォリオが社会に生かされる学習基盤の構築に関する調査研究」に取り組んできた。インターネット市民塾の学習プラットフォームにこのeポートフォリオの機能を実装し、eポートフォリオの活用を実践的に評価するため、

再就職チャレンジ教室と就活チャレンジ教室の2講座をモデル講座として、その可能性を検討した。具体的な成果はそれぞれの章で詳細に記述するが、目標設定と日々の活動を記録するという行為が、主体的な学習態度の形成に役立ったこと。特に、記録の共有機能とそれに基づく講師やメンターなどからのアドバイス機能が、自己の内発的動機づけに非常に効果的であった。具体的な目標設定を行い、長期的な展望を持ち、自分の活動の記録と他者との対話を通じて、自分の強みや弱さを認識し自己のイメージを明確化していく過程がeポートフォリオの機能を通して明らかにされたのである。

他方、個の学習や活動成果を、その特性に応じた就業や社会参画に役立てるためには、学校教育等の教育機関と地域の就業支援機関や生涯学習関係機関とのシームレスな情報の接続をどのように図っていくか、連携を意識したeポートフォリオの活用可能性や組織的ネットワークの構築などが求められる。個に対する社会的支援組織との関係でのeポートフォリオの活用、具体の就業支援のためのジョブ・カードなどとの関係、学校教育から就業に至る過程、また新たな就業のための再チャレンジなど、個の生涯を通じた学びの軌跡としてのeポートフォリオの可能性など、長期的な調査研究が求められる。今後ぜひ取り組みたい課題である。

我が国ではまだまだ、これらの実証研究が少ない。生涯学習における多様な学び直しと就労を考えると、一人ひとりの学習や活動の履歴であるeポートフォリオが、これからの社会ではますます求められることであろう。本実証研究の成果が、今後の生涯学習の進展に役立つことを期待したい。

平成23年3月

富山インターネット市民塾推進協議会理事長

地域学習パスポート研究協議会代表

山西潤一

目次

1	調査研究の目的と概要.....	1
1 - 1	調査研究の背景.....	1
1 - 2	調査研究の目的.....	2
1 - 3	調査研究の概要.....	3
1 - 4	今年度の実施概要.....	4
2	ポートフォリオの概要.....	6
2 - 1	ポートフォリオのねらい.....	6
2 - 2	ポートフォリオのしくみ.....	7
2 - 3	国内外の状況.....	10
2 - 4	eポートフォリオとキー・コンピテンシーの形成.....	11
3	学習活動におけるeポートフォリオの試行的利用.....	14
3 - 1	試作システムの概要.....	14
3 - 2	モデル講座の開催.....	20
3 - 3	eポートフォリオの利用評価.....	26
3 - 4	実証評価にけるeポートフォリオの課題.....	38
4	eポートフォリオ活用の評価と可能性.....	39
4 - 1	eポートフォリオは学習の何を支援したか.....	39
4 - 2	高校生のキャリア教育における可能性.....	41
4 - 3	就業力向上における可能性.....	44
4 - 4	企業からみた評価と可能性.....	47
4 - 5	生涯学習の事業推進における可能性.....	50
4 - 6	生涯学習の成果の評価における可能性.....	51
5	今後に向けて.....	53
5 - 1	eポートフォリオシステム機能の拡充.....	53
5 - 2	地域の協力体制のあり方と活用の社会的評価のしくみづくり.....	56
	資料編.....	59

1 調査研究の目的と概要

1 - 1 調査研究の背景

学校教育を修了後、大学卒業生の約3割、高等学校卒業生の約5割が3年以内に離職しているという現状がある。ニートやフリータ予備軍であるこれらの若者には、新たな就職のための学び直しとして、より自分の適性を自覚するための活動や、知識や技術を身につけ、再チャレンジを行う機会の提供がますます必要になってきている。

一方、子育て後の世代や企業を定年退職した者が、地域で社会参加しようとする時、それまでの学びの積み重ねや豊富な経験を生かしつつ、新たに自身の活動の道を拓く「自立力」、さまざまな価値観の人の中で良好な人の関係を作り、目標を共有して推進する「関係力」や「道具力」など、いわゆるキー・コンピテンシーが改めて問われる。このようにセルフ・エンプロイメントとして自分で仕事を作っていくために多くの人が学び直しを求められる状況になっている。

富山県で平成19年度から取り組んできた再チャレンジ学習支援事業では、学び直しを必要とする若者、定年後の新たな仕事を求めるシニア、子育てのため一旦は離職し、再就職を希望する者などを対象に、学び直しのための学習支援を行って来てきた。

その際、多くの例では自らの学習の積み重ねについて、資格取得などを除き記録がなく体系的な自己評価ができない状況があった。このため自身の適切な目標づくりのみならず、支援機関でのキャリア・コンサルタントによるアドバイスを必ずしも適切に受けることができているか疑問が残った。さらに学びや経験を生かして新たな社会活動にチャレンジするための力＝キー・コンピテンシーについても、自己評価や他者評価により自身の現状を十分把握していないことが多く見られ、知識や経験を生かすことができず、再就職した企業をわずかの期間で離職する例も聞かれた。

また、大学では、入学後の継続的な学習や活動の記録が十分とは言えず、就職活動の時期になって、自らを自己分析し職業の適性を考えようとして、これまでを振り返るためのデータ、客観的データの重要性にはじめて気づく学生が少なくない。学校教育段階から主体的な学習のための振り返りと社会への接続に向けた学習成果の記録と他者への適切な表現が求められている。

これらの背景から、自身で振り返り学んだことの意味や役立てる力を再評価し、新たな学びの目標へと結びつける自立性が強く求められていると言える。また、そのための学習や活動、成果の記録と可視化、次の目標に向かって自身のアイデンティティを確立し、支援者や新たな社会チャレンジを行おうとする関係者に根拠をもって説明できる説明性が大変重要と言える。さらにこのような持続的学びを育み、客観的データに基づく行動決定のためには、就学期から成人期を通して学習や活動を記録・蓄積していく継続性が改めて重要となってきた。学校教育・高等教育、社会教育・生涯学習を通じ、一人

ひとりのレベルで学びと活動をいかに連続的に捉え、社会活動に生かす推進の基盤づくりは、大きな課題と言える。

1 - 2 調査研究の目的

本調査研究は、学習や活動の記録・蓄積、分析、自己評価の自立的な仕組みとして、近年、高等教育機関を中心に開発研究されてきているeポートフォリオを、生涯学習支援に実践的に応用するとともに、地域の学習支援、就業支援機関等が連携し、学習や社会活動の実績を記録・証明することで、学びの蓄積が社会に生かされるシームレスな基盤について実践的な研究を行うことを目的としている。具体的には、

個人の持続的な学習と活用の仕組み

一人ひとりの学習や社会活動とその成果を継続的に記録し、自己評価するとともに、社会に目を向けて新たな活動への目標を持ち、社会参加、就業・起業へのチャレンジを目指すなど、学習を基盤とした持続的な成長を支援する仕組み

地域ぐるみの支援体制

職場や地域の学習支援機関、就業、地域活動支援機関等が協力し、一人ひとりの学習や社会活動の実践の記録と証明を行うなど、地域ぐるみの相互連携支援体制

学習と社会を結びつけるシームレスな基盤システム

一人ひとりの学習と社会活動の実績を多様な価値観で評価し、上述した各機関での客観的な証明を、産業や地域の課題解決と発展に寄与するための就業や起業、地域活動などの社会チャレンジにシームレスに役立てる基盤システム

学校教育を含めた生涯にわたる連続的な支援体制

就学期から壮年期、老年期の生涯にわたる学習や社会活動の記録・評価、活用に関する持続的な支援を可能とする社会システムのモデル

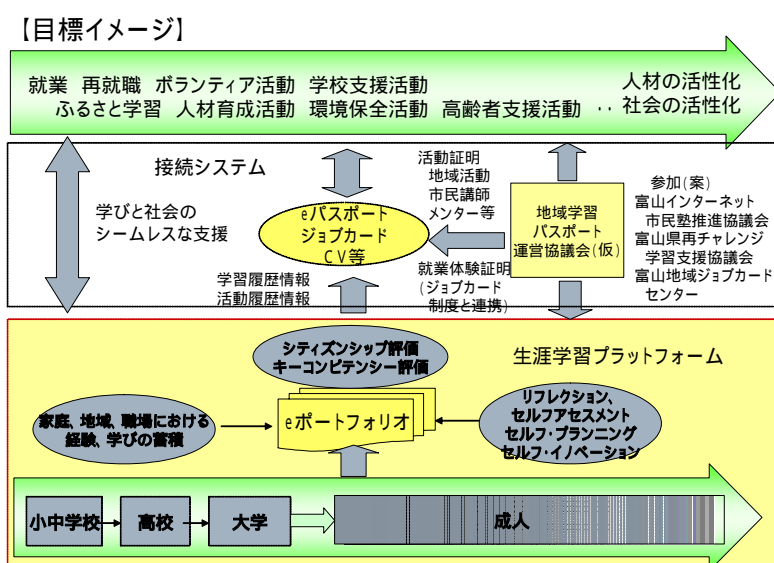


図 1 一人ひとりのeポートフォリオを社会に積極的に生かす地域基盤を目指して

本研究は、就学期から成人を通じて生涯にわたる学習の積み重ねと社会活動への積極的な反映を支援する推進基盤・体制＝生涯学習プラットフォームの構築を目指した実証的調査研究を目的としている。

1 - 3 調査研究の概要

本調査研究は、関係機関における新しい概念に対する共通理解を得ながら協力体制を構築していくことが不可欠である。また、教育の質保障に関する国レベルでの検討をにらみながら、段階的に効果を実証しながら進めていく。

(1) 第一段階

学習者の効果的な活動による教育効果等に関する研究

- ・ 一人ひとりの学習や社会活動を継続的に記録・蓄積し、随時その蓄積を自己評価しながら新たな目標へ役立てるなど、個々人へのeポートフォリオの試行的提供を行う。
- ・ eポートフォリオを活用することによる、学習の拡大やキー・コンピテンシーの形成など、教育的効果の検証を行う。
- ・ eメンター等、一人ひとりの記録と自己評価に対するアドバイスを行う支援人材の育成を行う。

(2) 第二段階

地域・社会の活用の受容性に関する研究

- ・ 大学や地域の学習支援機関、就業や地域活動支援機関等への協力を呼びかけ、履修証明、社会活動の実践証明としてのeパスポートを試行的に発給する。
- ・ 学習成果を社会活動に役立てることを支援するシームレスな基盤システムについて、地域の支援・運用の基盤づくりに向けた提案を行う。

(3) 第三段階

就学期から成人期に至るシームレスな活用とその運用を支える社会システムの研究

- ・ 学習成果を社会活動に積極的に結びつけることを支援する体制について、商工会議所や就業支援機関等に活用の協力を求め、試行的に運用する。
- ・ eポートフォリオ、eパスポートの効果的な運用システムについて検証する。

今年度は、第一段階としてeポートフォリオの試行的活用による教育的効果や自立的な学習への効果について実証的評価を行う。

1 - 4 今年度の実施概要

(1) 対象地域および実施体制

第一段階における実証評価は、インターネット市民塾システムを活用して幅広い世代の学習と社会活動が展開されている富山県を対象とし、産学官が協力して運営を行っている富山インターネット市民塾推進協議会を核に、次の体制で取り組みを進めた。

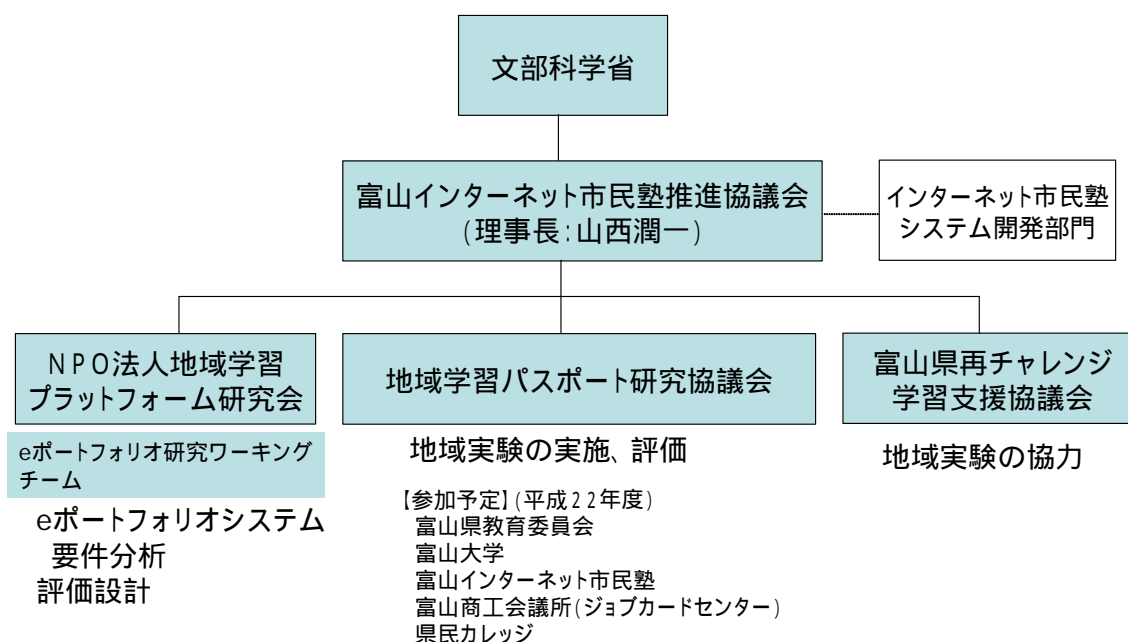


図 2 調査研究の実施体制

NPO法人地域学習プラットフォーム研究会は、これまで先行して生涯学習分野におけるeポートフォリオ活用研究に取り組んできたことから、本事業ではeポートフォリオシステムの要件の取りまとめとその評価設計を担当した。

富山県再チャレンジ学習支援協議会は、社会人の学習支援体制と就業や社会参加支援体制が一体となり、平成19年度から地域の横断的な仕組み＝生涯学習プラットフォームの構築に取り組んできた。本事業では学習成果を生かす就業、社会参加支援の立場で地域実験の推進に加わっている。

(2) 調査研究の実施概要

eポートフォリオの要件の分析

学習・活動の記録、その蓄積による振り返りや自己分析、その分析や他者評価をもとにした目標づくり、目標を意識した学習・活動へと、学びの自立・継続性を促進する仕組みについて検討を行った。検討にあたっては、先行してeポートフォリオを活用しているヨーロッパ等の事例をもとに、キー・コンピテンシーによる社会

人の学力を評価できる枠組みも取り入れ、eポートフォリオシステムに求められる要件をまとめた。詳細は「2 eポートフォリオの概要」を参照。

eポートフォリオシステムの構築

eポートフォリオの要件の検討をもとに、eポートフォリオの活用評価を行うための試行システムの開発を行った。開発にあたっては、eラーニングやSNS等インターネット市民塾の既存の機能と連携して、多くの参加者が効果的に活用できるよう、付加機能として開発し実装した。詳細は「3-1 試作システムの概要」を参照。

学習設計

試行システムを活用して、eポートフォリオの教育的効果等を評価するため、富山インターネット市民塾で開催する2コースについて、eポートフォリオの活用を想定した学習設計を行った。

モデル講座は、下記の2コースを用意した。

- ・就活チャレンジ教室
- ・再就職チャレンジ教室

この2コースのモデル講座の中で、学習者が「就活」や「再就職」または「キャリア教育」としての学習過程で、eポートフォリオの記録や活用が促されるよう設計した。詳細は「3-2 学習設計」を参照。

地域実験の実施

平成23年1月29日から同3月17日にわたって、上記の2コースに計11名の受講者の参加を得て実施した。この中には、進路を考えるキャリア教育として高校生も参加している。開催期間を通じて、モデル講座講師のほか、キャリア・アドバイザー、eメンター、および高等学校の進路指導担当者が、eポートフォリオの記録等を介して学習支援を行った。また、本調査研究に関わる研究協議会委員等もネットを通じて進行状況を把握し評価分析にあたった。

実施評価

地域実験の実施評価をもとに、学校教育、高等教育、社会教育・生涯学習、企業等のそれぞれの課題に照らし合わせ、eポートフォリオの可能性と課題について考察を行った。学習者の活用効果だけでなく、学習支援者、学校教育・生涯学習等の学習提供機関、企業等の評価への活用など、さまざまな視点で可能性と課題を検討した。

2 eポートフォリオの概要

2 - 1 eポートフォリオのねらい

eポートフォリオは、電子ポートフォリオとかデジタルポートフォリオとしても知られ、電子版の成果集として、成果物としてテキストや画像、動画、ハイパーリンク等の様々なタイプの電子ファイルが保存される。また、それらの成果物を利用した、自身の振り返り（リフレクション: reflection、省察とも言う）による理解の深化や、自身の能力の実証等に活用できる。紙を利用したポートフォリオは古くから教育現場で活用されていたが（Zubizarreta, 2009）電子化、Web アプリケーション化することで、eラーニングシステム等他のシステムとのデータ連携、オンラインでの相談・指導（メンタリング）、自身の成果のインターネット上への公開等、様々な新しい可能性が出てきた。紙とeポートフォリオの比較実験の結果、eポートフォリオのほうがよりよい学習成果を導くことが示した報告もある（van Wesel & Prop, 2008）。

後に述べるように、eポートフォリオには、対象となるユーザ（学習者、教員等）、その利用の期間や範囲（授業、カリキュラム、生涯等、粒度とも言う）によって、様々なタイプがあるが、ここでは学習者を対象とした「学習eポートフォリオ」であり、ある程度長い期間（年度をまたぐ）、広い範囲（科目単位ではなく、科目横断的利用を想定）での利用が可能であることを想定している。

LMS（学習管理システム Learning Management System）等のeラーニングシステムにより、時間や空間の壁を越えて学習の機会を得ることができるようになっただけでなく、個々の学習者の学習履歴の詳細なモニタリング、自動採点テスト、非同期のグループ学習等のオンラインならではの機能による効果的な学習も行えるようになってきた。また、学習成果物もデジタル化され、再利用可能な形で記録できるようになってきた。

しかし、LMSは、通常は科目単位で管理されるため、あくまで科目を軸に整理され、個々の学習者を軸に科目をまたいで学習成果をまとめることができない。LMSが科目単位なのに対して、eポートフォリオは、個々の学習者を軸に学習成果を蓄積・活用することから、学習者単位である。LMSはどちらかと言えば科目を提供する教授者側の視点であるのに対して、eポートフォリオは学習者側の視点であるとも言える。この2つの軸は相反するものではなく、LMSとeポートフォリオと組み合わせる（または、LMSにeポートフォリオ機能を付加する）ことで、科目単位の学習成果を個々の学習者を軸にまとめなおし、その学習者の様々な学習成果を有機的に結びつけ、成長を促すことが可能になる。

また、学習eポートフォリオの重要な側面として、学習成果物の集積に加え、リフレクションによる学習理解の深化が挙げられるが、リフレクションを促進するにはメンタリングが効果的である。オンラインのメンタリングは、eメンターの配置や協調学習による副次的メンタリング等が可能であるが、その学習形態や目的等によって、どちらかないし両

者の組み合わせも考えられる。さらに、オンラインと対面の組み合わせも考え得る。上手なメンタリングを行うことによって、学習意欲や目的意識の維持や向上につながり、学習の継続とリフレクションによる理解の定着と深化を効果的に行うことができる。

2 - 2 eポートフォリオのしくみ

後述のeポートフォリオのIMS等による詳細な分類もあるが、まず、一般的によく使われているeポートフォリオの概念について述べる。よくeポートフォリオのしくみの説明に用いられる概念図を図3に示す。

ここにあるようにeポートフォリオは大きく2つの側面を持つ。それは、図の左側半分を示される内部に閉じたリフレクション(Reflection)による学習を深める役割と、右側半分を示されるショーケースといった学習成果を外部に提示する役割がある。いずれに対しても学習成果の収集(Collection of Artifact)が前提である。

左のリフレクションに関する部分では、学習中に、先生や仲間の学習者役から(role of teacher or peers)からフィードバック(Feedback)を得ることで、リフレクションを繰り返し、学習を深めることができる。このフィードバックをもう少し深く掘り下げて考えると、メンタリング(Zubizarreta, 2009: p.25)ととらえるのがより適当であろう。「先生や仲間役」という少し曖昧な表現を、適切な助言やフィードバックを行い学習者のリフレクションを促す役割をeメンター(学習支援者)として定義する。科目単位やクラス単位といった比較的小さな単位のeポートフォリオであれば、eメンターの役割は先生や仲間の学習者が負うことも可能な場合もあるだろうが、より長い時間スケールやより広範囲の学習の場合(粒度の大きい場合)は、科目毎に先生や仲間の学習者は別々であり、eメンターの役を演じることは難しい。またメンタリングの一部の機能は、例えば、学習成果の蓄積度合いやリフレクションの書き込み数等、統計的・数値的に示せるものもあり、システム的に実現可能な部分もあると考えられる。

特に生涯学習の場合、時間スケールが長いため、科目の先生やそこでの学習者がeメンターの役を演ずることは難しく、個々の学習者の長期的な目標や地域・社会との関わりを考えて、その学習者が緊密に相談できる人材や同じ目的を共有できるコミュニティからeメンター役を置くべきであろう。また、生涯学習はその継続性が重要であり、学習者が自立的に学習を継続できる仕組みが欲しいところである。eポートフォリオは、学習成果を蓄積し、リフレクションを行うことによって、自分についての理解が深まることで学習目標がより明確になると同時に、学習の積み重ねの重要性を認識できることから、自立的な学習を支援する機能を内包しているといえる。

右のショーケースに関する部分は、リフレクション等で改善されつつ蓄積された学習成果物を、主に外部の対象者に効果的に提示し、学習者の能力を的確に理解してもらうことを目的としている。提示する目的や対象者に対して、もっとも相応しいショーケースを用意することが重要であり、目的に応じて複数のショーケースを設置することになる。

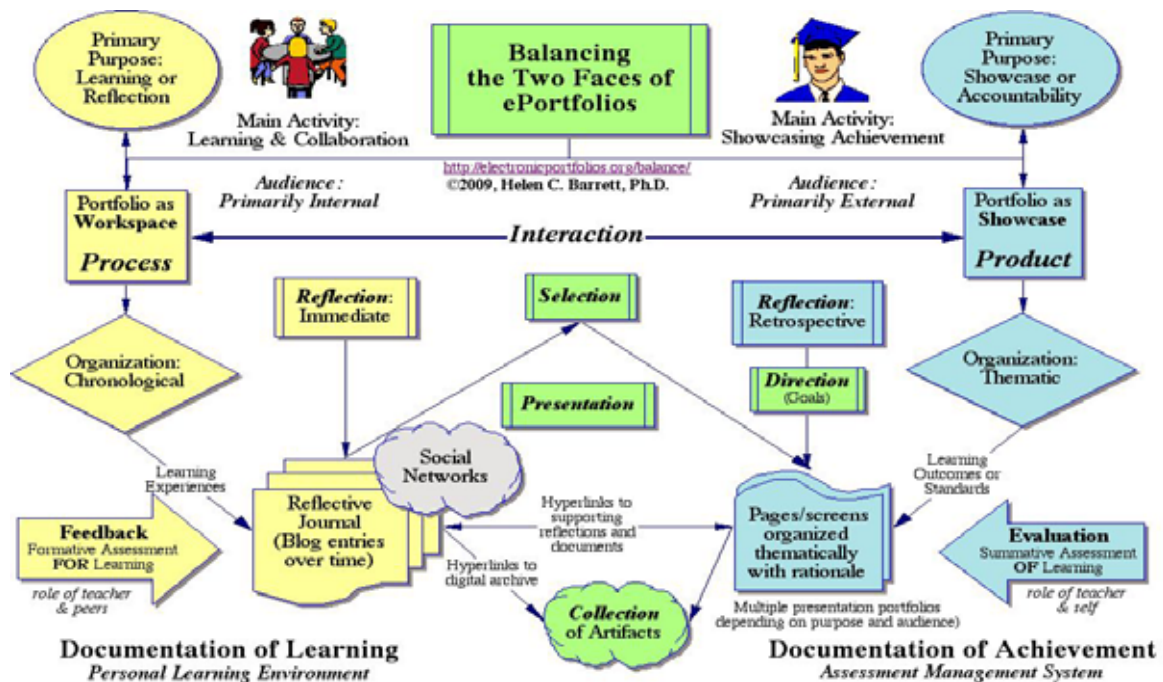


図 3 eポートフォリオの概念図（2つの側面）

（出典: Balancing the Two Faces of ePortfolios <http://electronicportfolios.org/balance/>）

eポートフォリオと言っても、その目的によって様々なタイプがある。eラーニングの国際標準化を行っているIMSがeポートフォリオのデータ互換を実現するための国際規格を提案しており、ここでは一つの分類例として紹介する。具体的には、この規格のVersion 1 Public Assessment Draft Specificationの中のIMS ePortfolio Best Practice and Implementation Guideという文書中にある分類である(IMS, 2005)。以下に、意味する内容を考慮し訳してみたものを示す。

- ・ Assessment ePortfolios（評価eポートフォリオ）
 評価者へ達成度を提示するために利用される。達成度を段階に分けて記述するルーブリックがよく用いられる。例として、大学の看護学生が卒業に必要な看護に関するコンピテンシーに対する学習成果を提示し評価を受けるために利用される。また、学部や学校が認証評価を受ける目的でも利用される。
- ・ Presentation ePortfolios（プレゼンテーションeポートフォリオ）
 相手（評価者）に対して、学習成果や達成度を説得力をもって提示するために利用される。また、しばしば、それらを上手に提示するためのインストラクションが含まれたり、専門的な資格等のデモンストレーションのために用いられる。例として、ソフトウェア技術者が就職目的で、持っている資格や作成したプログラムのソースコード

や雇用履歴などを示すのに使われる。また大学教員がテニアを取得するために用いられることもある。

- ・ Learning ePortfolios (学習 e ポートフォリオ)

時間をかけて学習内容を記録し、指導し、発展させる(リフレクション)ために使用される。しばしば、優れた振り返りのための要素を持っており、メタ認知の促進や学習の計画や多様な学習経験の融合のために用いられ、正式な教育課程で最もよく活用される。例として、中等教育で学生に学習 e ポートフォリオを活用させ、一年を通じていかに技術的なスキルを改善するかをその過程を辿りつつ振り返らせるために使われることがある。

- ・ Personal Development ePortfolios (自己啓発 e ポートフォリオ)

英国では、自己啓発(Personal Development)プランは「自身の学習、能力、実績についての振り返りと個人開発、教育開発、キャリア開発のための計画による構造化された支援プロセス」として定義されている。よって、自己啓発のための e ポートフォリオは、リフレクション可能な学習、能力、実績の記録や、そのリフレクションから得られたアウトカムを将来の計画とともに含んでいる。このポートフォリオは学習 e ポートフォリオを内包しているとも言えるが、それを越えて、職能開発や雇用とも関連しているため、プレゼンテーション e ポートフォリオとしてもしばしば利用される。

- ・ Multiple Owner ePortfolios (共有 e ポートフォリオ)

e ポートフォリオの内容やプレゼンに複数人が関わる。他の e ポートフォリオとの組み合わせ。機関、グループ単位。

学習した内容やそのプレゼンテーションを発展、改善に寄与するために複数人に利用を許可するものである。この e ポートフォリオは上で紹介した e ポートフォリオの要素の組み合わせのようでもあるが、Web サイトやグループによるブログ等の目的ではプレゼンテーション e ポートフォリオの形式をとり、グループ学習による学術的な成長のためグループで利用される場合は学習 e ポートフォリオの形式をとる。

- ・ Working ePortfolios (ワーキング e ポートフォリオ)

以上紹介したすべての e ポートフォリオの要素の組み合わせである。複数の表示形式を含み、それらは、評価 e ポートフォリオ、プレゼンテーション e ポートフォリオ、学習 e ポートフォリオ、自己啓発 e ポートフォリオと似ているであろう。NLII の定義では、ワーキングポートフォリオは、一つか複数の e ポートフォリオの内容を含んだより大きなアーカイブとなっている。ワーキング e ポートフォリオは、他の人やグループがアクセス可能なビューを作成する際は、一般的に一つの主題のみアクセス可能である。

以上のように e ポートフォリオ自体が非常に多様な形態を含み、またその対象となるユーザ(学習者、講師等)、利用の期間や範囲(授業、カリキュラム、生涯等)も多様である。

2 - 3 国内外の状況

国内外ともに高等教育機関の事例が多いが、全体的に海外の事例の方が先進的である感
は拭えない。特に北米の高等教育機関では、eラーニングに代表される教育のICT化がい
ち早く進み、学習成果の電子的蓄積が充分行われていること、卒業時等の学習評価の導入、
就職活動等での自己アピール等から、eポートフォリオの素地が出来上がっていた点も理
由として挙げられよう。ここで挙げた海外の例には生涯学習の例は無いが、海外の大学で
はフルタイムの通常の学生だけでなく、多くの社会人が学び直し、研修、学位取得等の目
的でパートタイムの学生として混じって学習しており、既に大学が成人学習の場として多
く利用されている。その枠組みでは、既にeポートフォリオも生涯学習に活用されている
と言えよう。また、eポートフォリオの2つの側面といった見方をすると、リフレクシ
ョンによる学習を深める役割と、就業等を目的とした学習成果を外部に提示するショーケ
ースの役割の両側面がバランスよく活用されている。

それに対して、国内の状況はかなり遅れており、eポートフォリオの導入は高等教育機
関を中心に最近になってようやく始められたといったところであろう。また、その土台と
なる、学習成果の電子化を含む教育のICT化や、eポートフォリオで重要になる機関、部
局、コース、科目等の単位での学習目標の設定がまだ充分整備されていないのも理由の一
つであろう。単独の高等教育機関以外では、非常に限られた例ではあるが、大学間コミュ
ニティや生涯学習（成人学習）への活用が始まったところであり、今後の進展が期待され
る。また、eポートフォリオの2つの側面といった見方をすると、国内の事例はほとんど
すべてリフレクシオンによる学習を深める役割としての利用であって、就業等を目的とし
た学習成果を外部に提示するショーケースの役割としての利用はほとんどない。リフレク
シオンによる学習の深化だけでなく、その成果を就業等に直接結びつけることで、より目
的意識も向上し学習の継続性も向上すると考えられ、社会的な支援体制の整備も含めて今
後、ショーケースの役割の導入に期待する。

2 - 4 eポートフォリオとキー・コンピテンシーの形成

(1) キー・コンピテンシーの枠組み

2008年の中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」では、現代を「総合的な『知』が求められる時代」ととらえている。「社会の変化に対応していくためには、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力及び他者との関係を築く力に加え、豊かな人間性等を含む総合的な『知』が必要となる。また、その他、自立した個人やコミュニティ（地域社会）の形成への要請、持続可能な社会の構築への要請等を踏まえ、生涯学習振興の必要性が高まっている。また、「社会の変化や要請に対応するために必要な力」として、「国民が生涯にわたって各個人のニーズに応じて学習を継続することができる環境を整備し、国民一人一人がこのような社会を生き抜いていくための総合的な力を身に付けることを支援する」とし、総合的な力の例として、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」である「主要能力（キー・コンピテンシー）」というOECDの定義を引いている。

この答申は、これまでの答申で述べられた次代を担う子どもたちに必要な『生きる力』に続いて、成人にも「変化の激しい社会を、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」を身につけることの重要性を説いたものである。

これからの社会で成人にも必要とされる力、キー・コンピテンシー（Key Competencies）の概念を提唱したOECDの成人コンピテンシーの定義と選択プロジェクト（通称デセコ）で定義されたコンピテンシーには次の3つのカテゴリーがあり、それぞれのカテゴリーには、さらにそれぞれ3つの力があるとされている。

表 1 キー・コンピテンシー

カテゴリー 1 道具を相互作用的に用いる力（道具を使う力） 【言語、記号、テキストを相互作用的に用いる能力】 【知識や情報を相互作用的に用いる能力】 【技術を相互作用的に用いる能力】
カテゴリー 2 異質な集団で交流する力（人間関係を作る力） 【他者と良好な関係を作る能力】 【協働する能力】 【争いを処理し、解決する能力】
カテゴリー 3 自律的に活動する力（自分を高める力） 【大きな展望の中で活動する力】 【人生計画や個人的活動を設計し実行する力】 【自らの権利、利害、限界やニーズを表明する力】

また、相互作用的に道具を活用する力、社会的に異質な集団で交流する力、自律的に活動する力、この3つのコンピテンシーはまったく別々に機能するのではなく、いろいろな状況に応じて重要となるコンピテンシーは変化する。また、一つのコンピテンシーの学習は、他のコンピテンシーの基礎ともなり、深い関連をもつものと考えられている。さらに、キー・コンピテンシーは、個々人の生涯にわたり成長したり、変化する。加齢にしたがい、キー・コンピテンシーを獲得したりすることもあれば、喪失していく可能性もある。その発達は、青年期から成人期を通じて継続し、状況に応じて変化するが、核心部にある思慮深さ、考える力だけは成熟に伴い成長すると考えられている。

コンピテンスとは、「特定の状況の中で（技能や態度を含む）心理社会的な資源を引き出し、動員することにより複雑な需要に応じる能力」とされた。特に重要となる複数のコンピテンシーとして、いろいろな状況に対応し、各国の教育政策に共通するものは何か問われたのである。

（2）キー・コンピテンシー自己チェック

上記の概念をeポートフォリオに役立てるため、セルフアセスメント支援の一つとしてキー・コンピテンシー自己チェックを取り入れる。

次の三つのカテゴリーによって、全部で45の項目からなるシートとなってeポートフォリオシステムの中で回答できるように設定する。

道具活用力として、言葉や図表を使う力（漢字を書く、文章を書く、図表を描く、外国語で外国人と話せるなど）、知識を使う力（情報収集、知識の整理、アイデアを考えるなど）、テクノロジーを使う力（携帯やパソコンを使う、eメールを書くなど）

自律的力として、異なる視点を持つ力（複数の見方ができる、相手の立場を考えるなど）、計画や物語を作る力（毎日の計画を立てる、仕事の段取りを立てる、人生計画を立てるなど）、自己表現の力（意見をはっきり言う、自分をふり返る、日記をつけるなど）さらに、

人間関係力として、関係を作る力（会った人の名前を覚える、挨拶する、人の話をしっかり聴くなど）、協働で働く力（人を思いやる、できないことは断る、苦手な人とも働く、人に助けてもらうなど）、問題を解決する力（社会や地域の課題を発見するなど）

45の項目については、受講者がいつでも自分のコンピテンシーをチェックできるようにしてあり、その記録も残るようにする。また、各項目は、

- 1．しようと思わない
- 2．あまりできない
- 3．助けがあればできる
- 4．ひとりできる
- 5．人に教えることもできる

の5段階のレベルを設定し、コンピテンシーの低いレベルから、高いレベルへと自己評価する仕組みを取る。各項目は、eポートフォリオを利用しながら、自分の学習力の向上目標にもなるように設計している（表2）。

表 2 キー・コンピテンシー自己チェック項目

【道具を使う力】	【自分を高める力】	【人間関係を作る力】
1) 常用漢字を書く	1) 本を読む	1) 会った人の名前を覚える
2) 文章を書く	2) 2つ以上の違う見方ができる	2) 挨拶をする
3) 論理的に考える	3) 相手の立場を考える	3) 人の話をしっかり聴く
4) 図表を描く	4) 毎日の計画を立てる	4) 人を思いやる
5) 地図を読む	5) 仕事の段取りを立てる	5) 人を笑わせる
6) 外国語で外国人と話せる	6) 人生計画を立てる	6) 人をほめる
7) 暗算をする	7) お金の使い方を考える	7) 近所の人と話をする
8) 家計簿や収支表を作る	8) 時間の使い方を考える	8) 道を案内する
9) 情報収集をする	9) 自分の得意なことを持つ	9) できないことは断る
10) 知識を整理する	10) 電話で対応する	10) 人に助けてもらう
11) アイデアを考える	11) わからないことを尋ねる	11) 人に力を貸す
12) 携帯やパソコンを使う	12) 意見をはっきり言う	12) 苦手な人とも働く
13) eメールを書く	13) マナーや規則を守る	13) 社会や地域の課題を発見する
14) twitter や mixi、Facebook などを使う	14) 自分をふり返る	14) 人を紹介する
15) プレゼンソフトを使う	15) 日記をつける	15) 人と交渉する

3 学習活動におけるeポートフォリオの試行的利用

3-1 試作システムの概要

eポートフォリオ試行システムは、1-2 調査研究の目的で示した「個人の持続的な学習と活用の仕組みづくり」を担うシステムとして設計を行った。このシステムを活用したモデル講座を実施する富山インターネット市民塾では、生涯学習ICTプラットフォームのeラーニング機能、SNS機能を利用し、様々な種類の講座、サークルが運営されており、大勢の利用者が学びあう学習プラットフォームとして有効に機能している。今回、受講者が富山インターネット市民塾上で行われている様々な学習活動に参加し、広く学びを深めることを意図して、eポートフォリオ試行システムは、この生涯学習ICTプラットフォーム上で稼働するシステムとした(図4)。

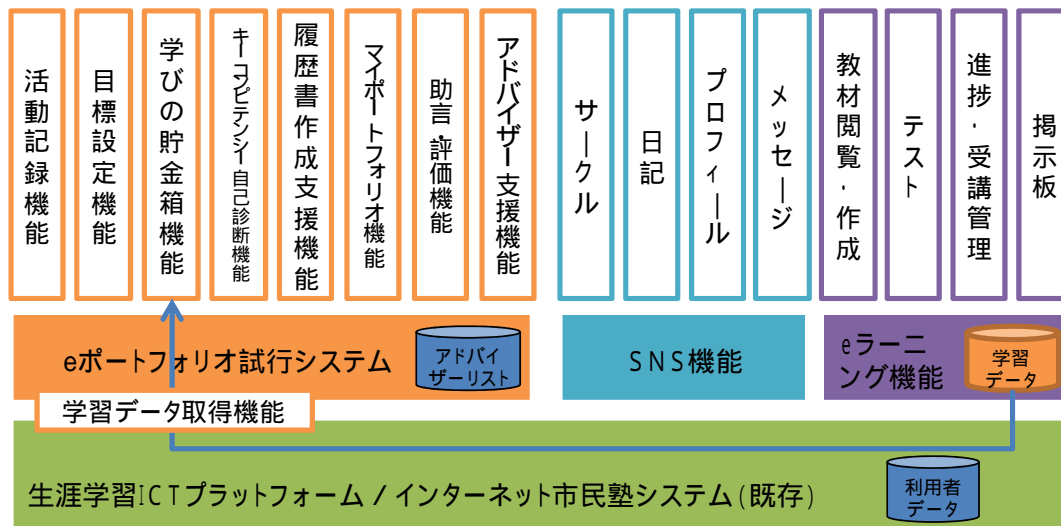


図4 システム構成図

また、eポートフォリオ試行システムには、学習データ取得機能を実装し、講座やサークルで活用されているeラーニング機能、SNS機能に蓄積された学習データを、eポートフォリオ試行システムから参照できるものとした。

システムの利用者は、eポートフォリオ試行システムに蓄積した記録を、記録に対しアドバイスや評価

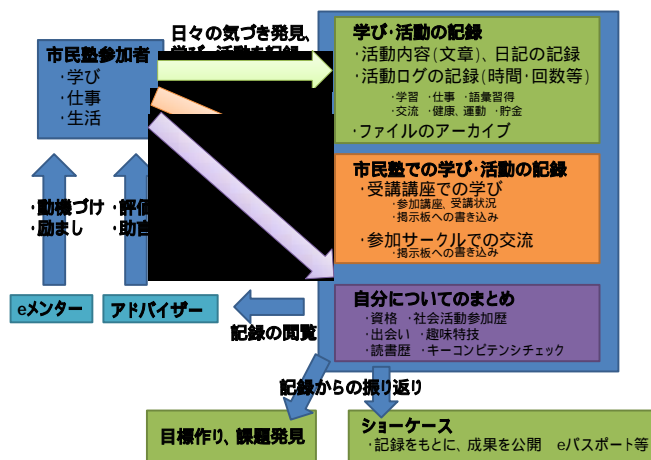


図5 インターネット市民塾とeポートフォリオの連携

を行うアドバイザーへ公開することができる。今回の試行的利用では、モデル講座での指導を行う講師、受講者のキャリアに関する疑問や悩み等に対しカウンセリングを行うキャリア・アドバイザー、受講者へのサポートを行うメンターをあらかじめアドバイザーとして登録している。アドバイザーは、モデル講座の受講者が公開した記録の閲覧と、記録に対する助言、評価を行うことができる。

1) 活動記録機能

富山インターネット市民塾に参加する受講者が、学習活動を記録し、蓄積された記録をもとに学習活動を振り返ることができる。

記録項目として、どこで何をしたかを示す「活動内容」、活動の結果を示す「活動の結果」、結果に対する「感想」があり、合わせて活動に関する画像の登録が行える。その他にも、目標設定機能で作成した目標に対し、記録を行う活動にてどの程度目標を達成できたのかを示す達成状況の記録が行える。

できるだけ活動を行っている現場で、携帯電話等で手軽に活動の記録が行えるよう、Twitterにて発信されたつぶやきをもとに、活動の記録が行える。

記録はテキストデータとしてダウンロードでき、学習のまとめの製作などに、記録を活用できる。他にも、講師やキャリア・アドバイザー、メンターなど受講者の指導的役割を持つグループ（アドバイザー）に対して、記録を公開できる。

また、公開された記録に対する、アドバイザーからの評価や助言をもとに、自身の学習について振り返ることができる。


アドバイザーにのみ公開 2011年 01月10日	活動内容	今日、ゼミがあったので先生に相談してみた。先生から、企業で働く先輩たちを集めて、先生のお宅で就職に関する相談会兼飲み会をひらいてほしいぞ、という提案をいただいた。 先生には、先輩たちに声かけをしてもらうことになり、私たちゼミ生は、つまみや飲み物を調達することになった。
	学んだこと	自分だけで考えず、いろいろな人に相談すると、いいアイデアを得られるかもしれないということがわかった。
	感想	いままで頭の片隅でぼんやりと気になっていたことが、今回、先輩たちに話を聞くという目標を立てたことで、先生に相談するという行動に移れたと思う。 単なる飲み会ではなく、先輩たちから仕事についてしっかりと話が聞けるように準備を行いたい。
	画像	
	実績	ゼミの先輩から、会社で働くことのやりかたを尋ねながら、会社で働くことに対する具体的なイメージを持てるようになりたい。 昨年、卒論テーマの絞り込みをサポートしてくれた〇〇先輩と話せる機会をつくり、今の仕事について尋ねてみる。 課題：先輩に話を聞く前に、自分なりに働くことについてどの様なイメージを持っているのか、まとめてみる。 (交流, 仕事) レベル 
	アドバイス	2011年01月19日 17:33 活動の記録に対するアドバイス 一人で考えていると察詰まってしまうことも、まわりの人に相談してみると解決のヒントをもらえたり、手を差し伸べてくれることがありますね。

図 6 活動記録機能をもちいて登録した記録

2) 学びの貯金箱機能

学びの貯金箱機能は、自身が持つ資格やボランティア等の社会活動への参加記録、趣味・特技、人との出会い、読んだ本の感想、長所、短所などを記録できる。記録に際して、活動の記録から学びの貯金箱へ転載したり、参加している学習講座での学習の記録（学習の進捗状況や掲示板での自らの発言記録等）を参照することができる。

また、アドバイザーへ記録を公開し、アドバイザーからの記録に対する評価や助言をもとに、これまでの自身の成長について振り返ることができる。

アドバイザーにのみ公開 2011年01月01日	長所(自己PR)	大学生生活で、スキューバダイビングサークルに入学し、2年生で副代表を務めました。 副代表では、早めの行動、各部員の個性や意見を尊重する事を常に心がけ、自分自身に責任感を持ち、一生懸命仕事をしました。
	アドバイス	2011年01月19日 15:50 「長所」に対するアドバイス 副代表として一生懸命取り組んだ仕事について、何か1つ具体的なエピソードを教えてくださいませんか？ なにかエピソードがあると、仕事華子さんのよいところについて、より深く伝わるように思います。 助言 愛さんのアドバイス 返信

図 7 学びの貯金箱機能にて登録した記録

3) 目標設定機能

目標設定機能では、長期目標と短期目標のふたつの種類の目標を設定できる。

長期目標では、目標とする内容の記録、達成期限の設定が行える。短期目標では、目標とする内容の記録、達成期限の設定のほかに、今の自分の状況や目標を達成するための課題の記録、目標の到達を示すための数値目標や達成度の設定が行える。活動記録機能を通して記録された目標に対する達成状況をもとに、設定した数値目標の到達度や、現時点での達成度をグラフにて確認できる。

目標に対する活動を終えた後や達成期限終了後には、自身が設定した目標とこれまでの活動を振り返り、その内容を目標に対する自己評価として記録することができる。

以上の記録は、アドバイザーへ公開することができ、記録を公開した場合は、アドバイザーから目標や、目標の達成状況等に対する評価や助

アドバイザーにのみ公開 2011年01月04日 ~ 2011年03月31日	現状	会社で働くことに対する具体的なイメージがわからない。 会社で働いている先輩たちは、仕事に対してどんなやりがいを感じながら、日々働いているのだろうか？
	目標	ゼミの先輩から、会社で働くことのやりがいを探しながら、会社で働くことに対する具体的なイメージを持つようになりたい。
	課題	昨年、卒論テーマの絞り込みをサポートしてくれた〇〇先輩と話せる機会をつくり、今の仕事について尋ねてみる。 先輩に話を聞く前に、自分なりに働くことについてどの様なイメージを持っているのか、まとめてみる。
	目標の種類	交流、仕事
	現在の達成度	🟡🟡🟡🟡 (4 / 5 レベル) 👉 実績登録の履歴を見る
	目標に対するアドバイス	2011年01月19日 17:44 短期目標に対するアドバイス 企業で働く身近な先輩として、家族の方に話を聞いてみるのもよいでしょう。 ちょっとした機会に、働いておられるごきょうだいや父親、母親から話を聞いてみたいかがでしょうか。 講師 太郎さんのアドバイス 返信
	自己評価	未登録
	評価に対するアドバイス	アドバイスはありません
	更新日時	2011年03月10日 09:24
編集		

図 8 目標設定機能をもちいて登録した記録

言を得ることができる。

4) キー・コンピテンシー自己評価機能

受講者の目標設定を支援するため、自身のキー・コンピテンシーを自己診断、評価する機能である。この機能は、全部で45の項目からなる質問（資料4参照）に「1. しょうと思わない」「2. あまりできない」「3. 助けがあればできる」「4. ひとりでできる」「5. 人に教えることもできる」の5段階のレベルから、自身の状況に当てはまる選択肢を選び回答すると、質問に対する回答結果をもとにシステムがキー・コンピテンシーの3つの観点である「自分を高める力」「人間関係をつくる力」「道具を使う力」毎に採点を行い、その結果をレーダーチャートにて図示する。各質問項目は、少なくとも、自身のコンピテンシーの向上目標にもなるように設計してある。

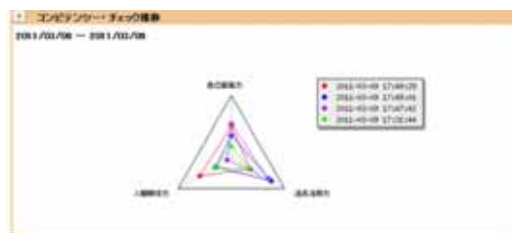


図 9 結果の推移

診断結果をもとに、道具を使う力として、言葉や図表を使う力（漢字を書く、文章を書く、図表を描く、外国語で外国人と話せるなど）、知識を使う力（情報収集、知識の整理、アイデアを考えるなど）、テクノロジーを使う力（携帯やパソコンを使う、eメールを書くなど）、自分を高める力として、異なる視点を持つ力（複数の見方ができる、相手の立場を考えるなど）、計画や物語を作る力（毎日の計画を立てる、仕事の段取りを立てる、人生計画を立てるなど）、自己表現の力（意見をはっきり言う、自分をふり返る、日記をつけるなど）、さらに、人間関係をつくる力として、関係を作る力（会った人の名前を覚える、挨拶する、人の話をしっかり聴くなど）、協働で働く力（人を思いやる、できないことは断る、苦手な人とも働く、人に助けをもらうなど）、問題を解決する力（社会や地域の課題を発見するなど）がどの程度あるのか把握できる。

また採点結果から3つの観点毎に、改善のためのアドバイスが表示される。

採点結果は全て蓄積され、3つの観点毎の結果の推移をレーダーチャートで図示することができ、過去と現在の自分の状況について比較分析が可能である。

5) 履歴書作成支援機能

eポートフォリオ試行システムを使って学習活動を行った人材を評価するためのデータとして、蓄積された学習記録が活用できるよう、履歴書やジョブ・カードの作成を支援する。あらかじめ、履歴書やジョブ・カードの記載項目がシステムに登録されており、受講者は、蓄積された記録を参照しながら項目を記載したり、学びの貯金箱機能を使って登録した記録を記載項目に転載することが可能である。

また、登録した記載項目はテキストデータとしてダウンロードできるので、ダウンロー

ドしたデータを加工・編集し、企業等へ人材評価のためのデータとして提出するなどの活用が行える。

6) マイポートフォリオ機能

活動記録機能や学びの貯金箱機能にて登録された記録、アドバイザーからの評価・助言、目標設定機能をもちいて設定された学習目標、キー・コンピテンシーの自己診断の結果等は、マイポートフォリオに一覧・概要表示される。受講者は、マイポートフォリオを通して、詳細な記録の閲覧や、記録の追加、編集が行える。

アドバイザーは、担当する受講者のマイポートフォリオを閲覧することができる。受講者のマイポートフォリオには学習に関する様々な記録が網羅されており、アドバイザーは、記録をもとに、個々の受講者に応じた助言、評価が可能となる。

7) 評価・助言機能

活動記録機能をもちいて記録された学習活動の履歴や、目標設定機能をもちいて作成した目標と目標に対する到達度、自己評価、キー・コンピテンシー自己評価の結果等をもとに、アドバイザーが記録に対して助言や評価を登録することができる。

また、受講者はアドバイザーからの助言、評価に対し質問等のコメントを登録できる。

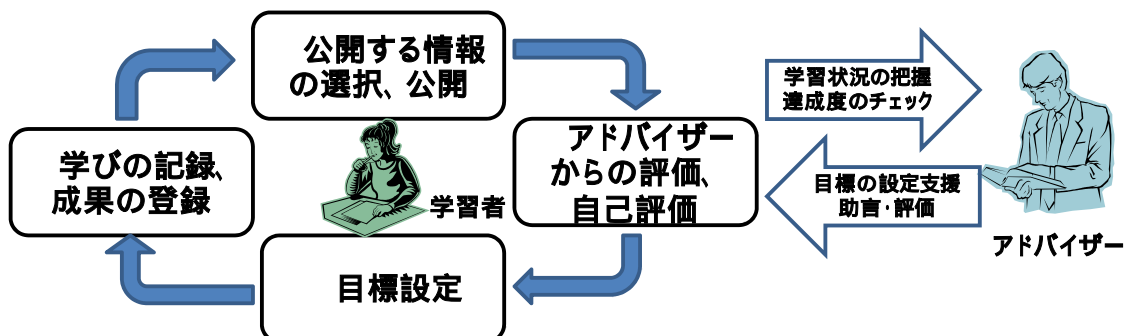


図 10 受講者の活動の過程とアドバイザーの指導

8) アドバイザー支援機能

アドバイザー支援機能は、アドバイザーが担当する受講者の学習状況を一覧で把握するための機能である。受講者の氏名などの情報に加え、受講者の最新の学習状況として、最終のシステムの利用日時や、活動記録機能、学びの貯金箱機能を使って受講者が登録した記録、アドバイザーからの評価・

	氏名	仕事 華子
	氏名よみ	しごと はなこ
	ニックネーム	仕事華子のニックネーム
	職業	学生
最新情報	最終ログイン	11/03/15 15:03
	アドバイス	▶ 11/03/10 ... 「資格」に対するアドバイス (講師 太郎)
	活動の記録	▶ 11/01/19 ... 「線り感」のうち録越商品に就いて学習した。 (0)
	学びの貯金箱	▶ 11/01/19 ... 「フェイスブック」若き天才の野望 (6巻) (1) 人をつなぐソーシャルネ。 (読んだ本)
⇒ ポートフォリオを確認する		

図 11 アドバイザー支援機能

助言を確認できる。また、担当する受講者が記録を行った際には、アドバイザー宛てにメールにて通知を行う。

以上の機能について、機能ごとの入力項目、出力項目は以下の表のとおりである。

表 3 各機能の入力項目、出力項目

機能名	画面項目名	アドバイザーへの公開設定	アドバイザーからのアドバイスの可否	入力項目	入力時、参照する画面項目	出力項目
活動記録機能	1.活動の記録			・活動の記録の種類 ・活動日 ・タイトル ・事実(どこで何をしたか) ・結果(学んだこと、身に付いたこと) ・感想	・学びの貯金箱 ・目標設定(目標項目)	・入力情報の登録履歴一覧 (月、目標項目での抽出 タイトル、本文での検索) ・カレンダー情報 (入力情報の活動日から)
	2.活動実績			・活動の種類 ・実績(数値) ・達成度(5段階)	・目標設定(目標項目)	・達成度(グラフ) ・現在の達成度(画像) ・目標
目標設定機能	3.目標設定(長期)			・目標 ・達成期限 ・目標に対する自己評価・コメント		・長期目標の登録履歴一覧
	4.目標設定(短期)			・目標の種類 ・現状 ・目標 ・課題 ・達成期限 ・数値目標(選択形式) ・目標に対する自己評価・コメント		・短期目標の登録履歴一覧 ・達成状況 (数値目標の到達度、達成度)
学びの貯金箱機能	5.学びの貯金箱	取得資格		・取得年月 ・実施機関名 ・資格名称 ・内容	・活動の記録	・入力情報の登録履歴一覧
		読んだ本		・日付 ・書籍名 ・メモ	・活動の記録	・入力情報の登録履歴一覧
		出会った人		・出会った日 ・出会った人の名前 ・コメント ・画像	・活動の記録	・入力情報の登録履歴一覧
		社会活動		・活動日 ・活動名 ・コメント ・画像	・活動の記録	・入力情報の登録履歴一覧
		趣味・特技		・活動日 ・活動名 ・コメント ・画像	・活動の記録	・入力情報の登録履歴一覧
		長所(自己PR)		・長所		・入力情報の登録履歴一覧
		短所		・短所		・入力情報の登録履歴一覧
		職歴		・職歴		・入力情報の登録履歴一覧
		職務経歴、 職務スキル		・職務経歴、スキル		・入力情報の登録履歴一覧
		市民塾参加講座 参加サークル				・参加している講座名、サークル名 ・講座での学習履歴 (データは市民塾より自動取得)
キー・コンピテンシー 自己評価機能	6.コンピテンシーチェック	x	x	・質問への回答		・回答の集計結果 (リーダーボード)
履歴書作成支援機能 助言・評価機能	7.履歴書作成支援 8.アドバイス			・履歴書、ジョブカードの入力項目 ・タイトル ・アドバイス、コメント	・学びの貯金箱	・履歴書、ジョブカードシート ・入力情報の登録履歴一覧
アドバイザー支援機能	9.アドバイザー			・氏名 ・ニックネーム ・職業		・氏名 ・ニックネーム ・職業 ・最終利用日時 ・最新の学びの貯金箱、活動の記録

9) システム環境

eポートフォリオ試行システムは、富山インターネット市民塾の学習基盤である生涯学習ICTプラットフォームにeポートフォリオの機能を追加するものであり、インターネット経由でWebブラウザにて利用できるクライアントサーバ型のシステムである。利用者は、インターネットに接続されたPCにて、InternetExplorer7、あるいはFirefox3以上のバージョンのWebブラウザを使ってシステムを利用できる。また、「活動記録機能」「マイポートフォリオ」の一部は、携帯電話の携帯ブラウザから利用することができる。携帯電話からは、主に日々の活動の記録や、活動の記録に対するアドバイザーからの評価、助言を閲覧できる。

3 - 2 モデル講座の開催

(1) モデル講座

eポートフォリオの活用を実践的に評価するため、富山インターネット市民塾で開催する講座2コースをモデル講座として用意した。

1) 再就職チャレンジ教室

概要： 自分自身のことを知ることは、再就職に必要不可欠である。自分の強みを知り、自分のことを理解すれば、適性も分かり、再就職の面接でも自信をもって話す事ができる。就職・転職支援の専門家・長井 亮氏による4回の集中講義と、期間中、自分のペースに応じて個別に相談できるネット教室で、再就職『成功』へチャレンジする。

表 4 再就職チャレンジ教室の実施日程

月	日	活動内容	テーマ	活動内容	自分の活動記録 個別サポート
1月	自主活動				『自分の活動記録』 目標を設定し、活動の実行スケジュールをたてる。 日々の活動記録をeポートフォリオに記録する。 発表(自分プレゼンテーション)の準備を行う。 講座終了(3月17日)以降も日々の活動記録をeポートフォリオに記録し、活用する。 『個別サポートを受ける』 講師に講座の内容や補足について質問する。 キャリアアドバイザーに就業に関する相談を行う。 eメンタに日々の活動について相談する。
	29日(土)	第1回 対面学習	自己分析	自分の過去を振り返り、適性を導き出す 短期目標(3/17または中期)目標を定める 講座の進め方(eポートフォリオの記入方法について) 終了後、eメンタとの交流会(約30分)	
2月	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	
	2/6(日)	第2回 対面学習	面接対策	自分の習慣を振り返り、行動を改める	
	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	
	2/21(月)	第3回 対面学習	将来設計	自分の未来を考え 目標(夢、直近等期間は本人の自由)を設定する	
3月	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	
	3/17(木)	第4回 対面学習	発表会	発表会(自分プレゼンテーション)	
	3/17以降	自主活動		・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	

2) 就活内定チャレンジ教室

概要:自身の習慣を見直し、社会で通用する人間になるための方法や心構えを学び、自分の適性を見て、やりたいことやできること、やるべきことを見つけ企業選びに繋げる。就職・転職支援の専門家による4回の集中講義と、期間中、自分のペースに応じて個別に相談できるネット教室で、就活内定『成功』へチャレンジする。

表 5 就活内定チャレンジ教室の実施日程

月	日	活動内容	テーマ	活動内容	自分の活動記録 個別サポート
1月	自主活動				
	29日(土)	第1回 対面学習	本当に分かる 自己分析	自分の過去を振り返り、適性を導き出す 短期目標(3/17または中期)目標を定める 講座の進め方(eポートフォリオの記入方法について) 終了後、eメンタとの交流会(約30分)	
2月	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	『自分の活動記録』 目標を設定し、活動の実行スケジュールをたてる。 日々の活動記録をeポートフォリオに記録する。 発表(自分プレゼンテーション)の準備を行う。 講座終了(3月17日)以降も日々の活動記録をeポートフォリオに記録し、活用する。
	2/6(日)	第2回 対面学習	面接でも評価される、社会で求められる人材	自分の習慣を見直し社会で通用する人間になるための方法や心構えを学ぶ	
	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	
	2/21(月)	第3回 対面学習	自分のやりたいことが分かる。 企業の選び方	自分の適性を見つけて、やりたいことやできること、やるべきことを見つけ、企業選びにつなげる。 目標(夢、直近等期間は本人の自由)を設定する	
3月	自主活動			・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	『個別サポートを受ける』 講師に講座の内容や補足について質問する。 キャリアアドバイザーに就業に関する相談を行う。 eメンタに日々の活動について相談する。
	3/17(木)	第4回 対面学習	発表会	発表会(自分プレゼンテーション)	
	3/17以降	自主活動		・自らの行動計画の実施など ・講師からの簡単な課題	

(2) 学習設計

モデル講座では、受講者が「再就職」や「就活」または「キャリア教育」としての学習の過程で、eポートフォリオの記録や活用が促されるようプログラムすることとした。

eポートフォリオの記録項目は表6の通りであり、その活用の関係は図12のとおりである。

表6 eポートフォリオの記録分類

活動の記録	日々の活動を「活動内容」「学んだこと」「感想」にわけて記録します。 設定した目標に関連した活動を行った時、実績時間等も記録します。 Twitterへの投稿を参照しながら記録できます。
学びの貯金箱	経験やキャリアを種類毎に記録します。 種類として、職歴、社会活動歴、取得資格、学習活動歴、人との出会い、読書記録があります。 この記録は、履歴書に反映することができます。
長期目標・短期目標	振り返りや自己分析を通し、「現状」「目標」「課題」「成果」について記録します。
コンピテンシー	「自分を高める力」「人間関係をつくる力」「道具を使う力」について自己評価結果を参照できます。
アドバイス	記録に対する講師、キャリア・カウンセラー、メンターからの評価やアドバイスを参照できます。
コメント	講師、キャリア・カウンセラー、メンターからのアドバイスに対して、質問等を投稿できます。

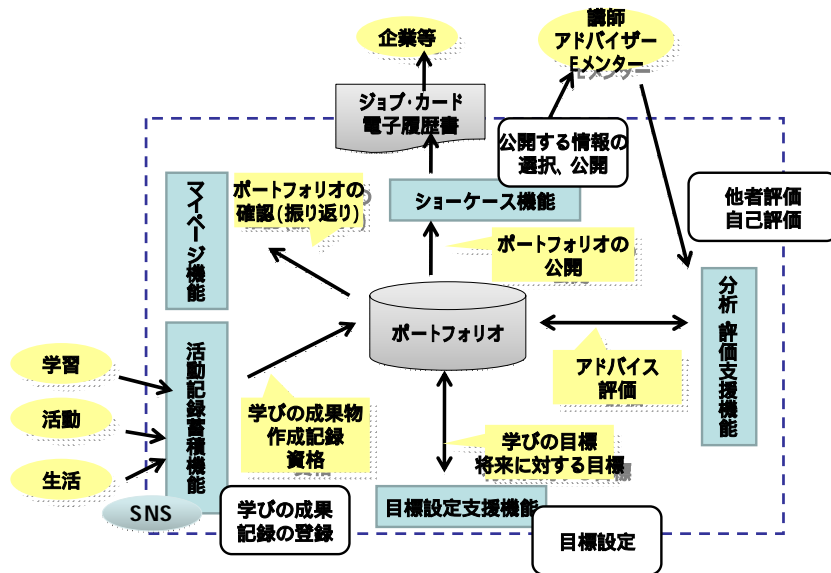


図12 eポートフォリオの記録と活用の関係

モデル講座の進行に沿って、eポートフォリオの記録や活用が図られるよう、図13のとおり学習フレームを設計した。

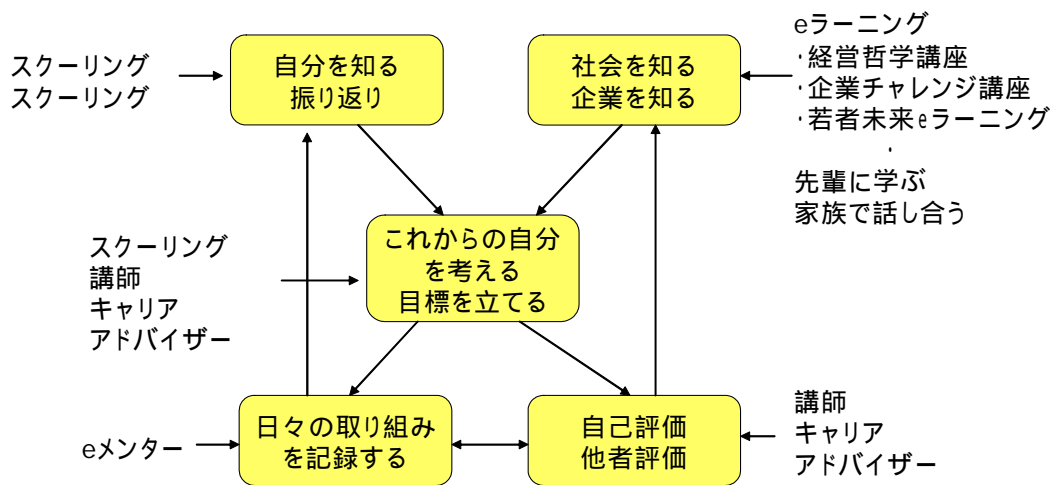


図 13 モデル講座の学習フレーム

- ・ 振り返る、自分を知る（自己分析） 学びの貯金箱、長所・短所等の記録
- ・ 社会を知る、企業を知る 集合学習、eラーニング
- ・ これからの自分を考える、目標を立てる 目標（長期、短期）の記録
- ・ 日々の活動、学習を記録する 活動の記録、蓄積
- ・ 自己評価、他者評価 コンピテンシー・チェック、アドバイス

モデル講座は、4回の集合学習と、インターネットを通じて期間中の継続的な学習や活動およびそれらをeポートフォリオとして記録するインターネット市民塾システムを併用し記録を通じた学習を支援している。

また、「社会を知る、企業を知る」ための補助教材をeラーニングにて提供し、受講者が自宅や学校等からいつでも学習し、目標づくりや目標に向けた課題を考えることに役立つこととした。

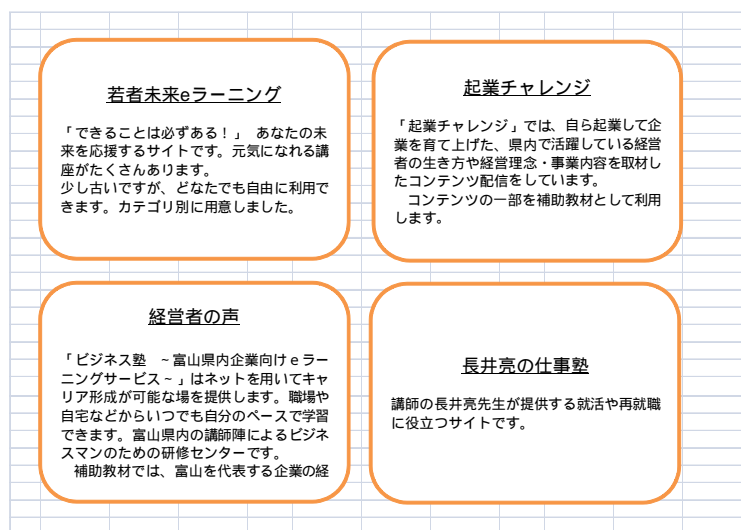


図 14 モデル講座における補助教材（eラーニング）

(3) モデル講座の実施および体制

モデル講座は、富山インターネット市民塾主催講座として、平成23年1月29日から同3月17日にわたって開催した。モデル講座には2コースに計11名が受講した。再就職チャレンジ教室には、20～40代の4名、就活チャレンジ教室には、専門学校生等の3名のほか、県立高校の協力を得て高校2年生4名もキャリア教育の一環として受講した(表7)。

表7 モデル講座受講者

再就職チャレンジ教室						就活チャレンジ教室					
番号	ニックネーム	性別	メンタ	年齢	備考	番号	ニックネーム	性別	メンタ	年齢	備考
1	A-1	男	E-5	45	無職 求職中	1	B-1	男	E-2	25	フリータ
2	A-2	男	E-1	38	専門学校生	2	B-2	男	E-4	23	専門学校生
3	A-3	男	E-1	25	専門学校生	3	B-3	男	E-5	20	専門学校生
4	A-4	男	E-3	28	無職 求職中	4	B-4	女	E-5、F-1	17	県立高校2年生 (進学希望)
						5	B-5	女	E-3、F-1	17	県立高校2年生 (進学希望)
						6	B-6	女	E-4、F-1	16	県立高校2年生 (進学希望)
						7	B-7	女	E-6、F-1	16	県立高校2年生 (就職希望)

開催期間を通じて、講師やキャリア・アドバイザーのほか、受講者それぞれに1～2名のeメンター(計6名)が担当した。また、高校の進路指導担当教諭もネットを通じて学習状況を共有した。さらに研究協議会の各委員もネットを通じて進行状況を随時把握し、eポートフォリオの活用についての評価にあたった。

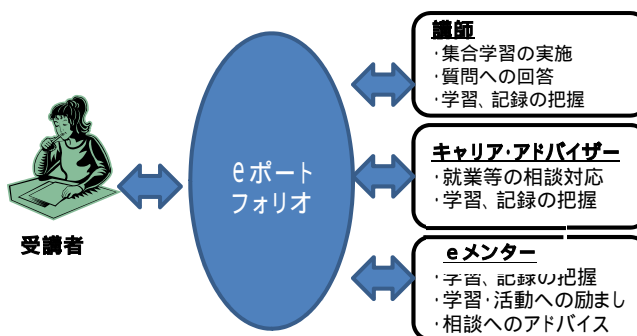


図15 モデル講座実施体制

それぞれの役割は次の通りである。また、講座の進行の中での役割は図15の通り。

- ・講師 集合学習(スクーリング)での講義
ネットを通じた受講者からの質問への回答
ネットを通じて受講者の学習状況、eポートフォリオの記録状況の把握
- ・キャリア・アドバイザー
ネットを通じた受講者からの職業選択や就業のためのスキル等の相談対応
ネットを通じて受講者の学習状況、eポートフォリオの記録状況の把握
- ・eメンター
ネットを通じて受講者の学習状況、eポートフォリオの記録状況の把握
ネットを通じて受講者の学習・活動への励まし、相談へのアドバイス等

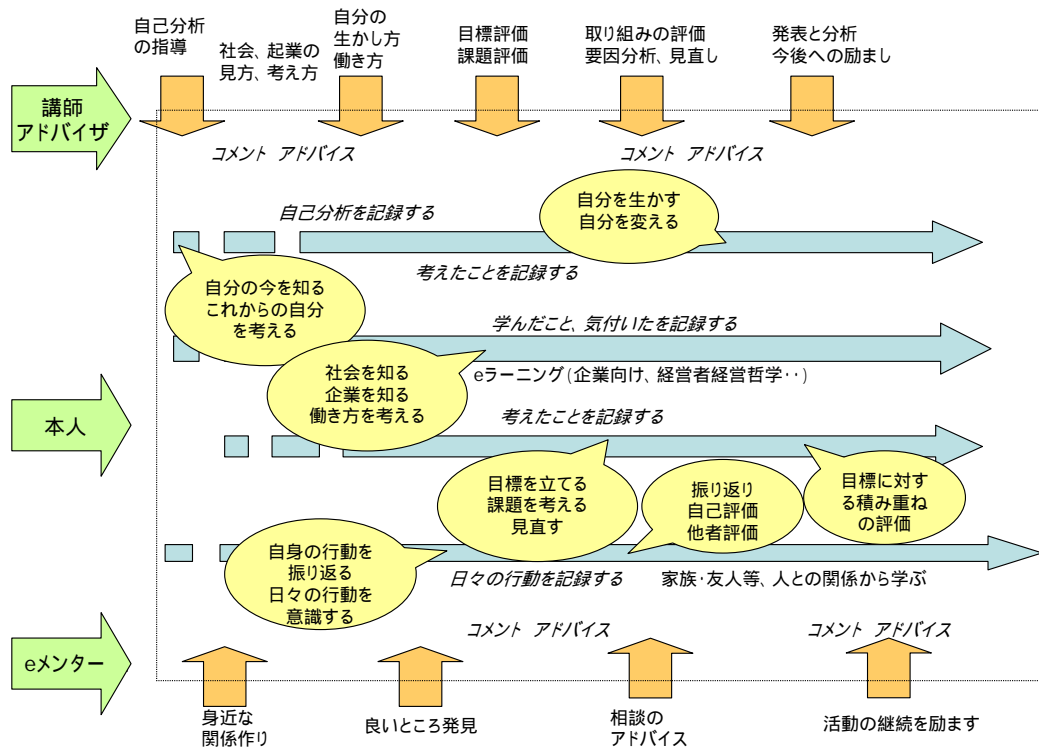


図 16 モデル講座の流れ

3-3 eポートフォリオの利用評価

(1) eポートフォリオの活用度合い

システムには、記録項目として学習時間や他者との関わり、学びや活動に対する関心事、短期目標、長期目標等が記録・蓄積されている。これらのエビデンスについて分析を行ない、eポートフォリオの活用に関する量的、質的な評価を行った。

eポートフォリオの記録は約1ヶ月半の短い期間の中で計213件あり、決して多いとは言えないがさまざまな分析を行うことができた。

表中の項番のA-1,A-2・・・は一般社会人向けの再就職チャレンジ教室の受講者を表す。また、B-1、B-2・・・は学生向けの就活内定チャレンジ教室の受講者を表す。縦軸は、4回行われた集合学習の間の期間を表す。

表8 eポートフォリオへの記録件数

	活動の記録													学びの貯金箱												
	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7		
第1回～	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	27	0	10	9	2	1	0	5	0	0	0	0		
第2回～	6	0	2	2	0	0	0	1	0	1	0	0	7	0	1	0	3	3	0	0	0	0	0	0		
第3回～	21	0	8	5	6	0	0	0	1	1	0	0	4	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1		
第4回～	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
計	31	0	11	9	6	0	0	1	2	2	0	0	39	0	12	9	7	4	0	5	1	0	0	1		

	長期目標													短期目標												
	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7		
第1回～	5	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0		
第2回～	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0		
第3回～	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0		
第4回～	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
計	7	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	0	7	0	2	2	1	1	0	1	0	0	0	0		

	コンピテンシー												
	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	
第1回～	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
第2回～	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
第3回～	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
第4回～	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
計	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	

	アドバイス													コメント												
	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	計	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7		
第1回～	17	0	4	4	2	0	2	1	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
第2回～	26	2	2	1	5	9	2	1	1	2	1	0	7	0	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0		
第3回～	53	1	11	9	4	2	3	1	4	6	4	8	9	0	7	0	1	0	0	0	0	0	1	0		
第4回～	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
計	99	3	18	14	11	11	7	3	5	10	7	10	17	0	7	0	3	5	0	0	0	0	2	0		

(a) 活動の記録

- ・ 就活チャレンジ教室受講者に比べ再就職チャレンジ教室受講者の記録件数が多い。
- ・ 集合学習の第3回目以降、第4回目の講座に向けて記録件数が増加している。第4回の講座では自身の将来設計についてまとめた内容を発表することもあり、活動や記録が活発となったと考えられる。

(b) 学びの貯金箱

- ・ 第1回目の集合学習で自己分析を行ったこともあり、第1回目～2回目までの記録件数が多い。
- ・ 集合学習の第2回目以降は学びの貯金箱への記録件数が減少したものの、継続して書き込みを行う受講者も多い。

(c) 長期目標

- ・ 第1回目の集合学習で長期目標の記録を促したので、一般受講者の75%が目標設定した。
- ・ 長期目標に対するアドバイスが多く、受講者にとっては長期目標の設定時だけでなく、アドバイスをもらうことで継続して目標に対する振り返りができたと思われる。

(d) 短期目標

- ・ 一般受講者の75%が設定した。また短期目標の設定変更や追加が見られた。
- ・ 短期目標に対するアドバイスが多く、受講者にとっては短期目標の設定時だけでなく、アドバイスをもらうことで継続して目標に対する振り返りができたと思われる。

(e) アドバイス

- ・ 再就職チャレンジ教室受講者では期間中、受講者からの記録数に応じて、講師、キャリア・アドバイザー、eメンターからのアドバイスを受けている。記録数が少ない受講者に対してもアドバイスが行われているが、受講者からの継続した記録につながっておらず、集合学習にて個々の受講者に対する適切なフォローが必要であったと考えられる。
- ・ 就活チャレンジ教室受講者は記録数が少ないが、講師、キャリア・アドバイザー、eメンターから継続的にアドバイスを受けている。

(f) コメント

- ・ 就活チャレンジ教室受講者では、アドバイスに対し、1/3から1/4の割合でコメントを返しており、受講者に対するアドバイスの効果が推測される。
- ・ 再就職チャレンジ教室受講者では就活チャレンジ教室受講者ほど活発な書き込みが見られなかったが、後半ではコメントがみられた。

(2) インタビュー調査

モデル講座終了時に受講者一人ひとりにインタビューを行い、eポートフォリオが自立的な学習にどのように寄与したか、また、システムの機能的な面の改善点を確認した。

表 9 インタビューでの聞き取り内容（まとめ）

活用のメリット	自己分析の際、メンターからのアドバイスがあり自己分析しやすかった。違う視点で、深く自分について考えることができた。
	講師やメンターからのフィードバックがもらえると、もっと深めて考えようとした。自分とは違う視点で考えることができた。
	メンターが、自分の集合学習の様子を客観的に分析して書いてくれたことに対して、自分では気づかない違う自分に気づくことができた。
	集合学習の後、家に帰って一人になって考えるときに役に立った。
	採用に直接役立ったというより、自分について、自分が今までやってきたことについて見なおす上で役立った。これからも自分を見なおすことに利用していきたい。
記録へのモチベーション	ただ記録するだけでは、記録するのは続かないが、メンターからのリアクションがあるとうれしい。メンターからのアドバイスが、記録をすることのモチベーションとなった。
	講座が終わってもポートフォリオに記録していきたいという期待が持てた。メンターの方にはお世話になって感謝している。
参加者	受講者同士で互いにアドバイスができるかもしれないと思う。
	もっといろんな方からアドバイスがもらえるとよかった。自分についてわかっていないので、いろんな方からの意見があると、いろんな見方、自分とは違う面で考えることができた。
利用頻度・利用時間	利用する時と利用しない時とで、利用の頻度にムラがある。1週間の間毎日書いたり、まったく書かなかったりした。講座を通して平均して3日に1回は使っていたように思う。1回使う毎に30分ぐらいかけていた。
	1時間以上考えて書くことがある。
	進路について迷っている時、採用選考の結果が出た時によく利用した。
システムの改善	自分が書きたいことをポートフォリオのどこに書けばよいのか迷った。書こうとしたことが記録の項目に当てはまらないことがあった。項目に縛りがあるのではなく、自由にゆるくなっているとよかった。
	富山インターネット市民塾の日記と活動の記録の違いがわからなかった。短期目標が残っていくこともわからなかった。
	書くことの手間は感じなかった。手間よりメリットの方が大きい。

受講者からはおおむね肯定的な評価を得ることができた。

特に受講者のeポートフォリオへの記録の数に関わらず、メンターからの助言や評価に

よって、受講者が気づかない視点で物事を考え、自分について深く考えることができた、との感想が多く得られた。利用頻度の面では、受講者の状況に応じて利用頻度にムラがみられたが、利用の際は長時間利用していることがわかった。また、記録を書き込まない場合でも、eメンターや講師からのアドバイスを閲覧したり自身の記録を振り返るなどして、在宅で学習を行っていたようである。また、4回の集合学習の間は、1～4週間程度間隔が空いていたが、eポートフォリオを利用することで、集合学習で学んだことを、普段の就活や、再就職活動を通して意識しながら活用していたとの話も聞かれた。

受講者に対するインタビューより、全体を平均すると3日に1回の利用頻度になるが、毎日利用することも見られた。また、1回あたりの利用は平均30分程度であるが、1時間以上の利用もある。

利用度合いに影響を与えている要因として、高校生はインターネットの個人別の利用環境が十分でないこと、また試験中の中断などが背景にある。また、インターネットを日常的に活用していない参加者もいた。さらに初めて利用することによる不慣れも見られ、利用を促進する説明機会を増やすことや、システムの改善によって活用度合いが向上する要素は多い。

講座では、受講者に対してアドバイスができるのは、講師、キャリア・アドバイザー、eメンターに限られていたが、受講者からは、様々な視点で考えるためにも、受講者同士や、講師、キャリア・アドバイザー、eメンター以外の人たちからもアドバイスを受けたいとの意見があった。講座の設計とも関連することであるが、受講者が自身の記録にアドバイスを行える人物を選択し招待できる新しい機能の必要性が示唆される。

(3) キー・コンピテンシー自己チェック

受講者の中では、再就職講座の受講者がキー・コンピテンシー・チェックを行っている。一度、仕事を経験した人々は、それぞれの職場でどのような力が必要とされているかをわかっている。そのため、自分に、それぞれの項目についてどの程度の力があるかを第3回集合学習終了までにチェックしている。しかし、期間が短いためか、最終の集合学習後、チェックを行っていないが、その結果は、インタビューで詳しく知ることができた。(チェックを行っていない受講者は、プライバシーに注意しているためと考えられる)

2011/02/21 13:31:20		コンピテンス	アドバイス
	自分を高める力	問題解決するにあたり目標や計画を立て、自律的に実行できる力は5段階中のレベル4です。かなり積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張りましょう。	
	道具を使う力	問題解決のために言葉、知識、経験をいかしたり、新しいテクノロジーに親しむための力は5段階中のレベル3です。積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張りましょう。	
	人間関係を作る力	人間関係を築き、互いに協力しながら、問題の解決ができる力は5段階中のレベル4です。人との交流を深めたり、一緒に活動することに取り組んでいるようです。この調子で頑張りましょう。	

(40代男性)

これまでの調査結果でも、年齢が高くなるにつれて、各コンピテンシーの力が向上していくことがわかっている。この男性は、最終講義には参加していないが、各コンピテンシーの力は他の人たちよりあると自覚している。

2011/02/15 20:42:32		コンピテンス	アドバイス
	自分高める力	問題を解決するにあたり目標や計画を立て、自律的に実行できる力は5段階中のレベル3です。かなり積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張ってください。	
	道具を使う力	問題解決のために言葉、知識、経験をいかしたり、新しいテクノロジーに親しむための力は5段階中のレベル3です。積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張ってください。	
	人間関係を作る力	人間関係を築き、互いに協力しながら、問題の解決ができる力は5段階中のレベル3です。人との交流を深めたり、一緒に活動することに取り組んでいるようです。この調子で頑張ってください。	

(30代男性)

総合的なバランスを持った男性の事例である。実際、この男性は、店舗の経営を任せられるほど人間関係の力も自律性も高い力を持っている。

2011/02/06 19:29:21		コンピテンス	アドバイス
	自分高める力	問題を解決するにあたり目標や計画を立て、自律的に実行できる力は5段階中のレベル3です。かなり積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張ってください。	
	道具を使う力	問題解決のために言葉、知識、経験をいかしたり、新しいテクノロジーに親しむための力は5段階中のレベル4です。積極的に取り組んでいるようです。この調子で、頑張ってください。	
	人間関係を作る力	人間関係を築き、互いに協力しながら、問題の解決ができる力は5段階中のレベル3です。人との交流を深めたり、一緒に活動することに取り組んでいるようです。この調子で頑張ってください。	

(20代男性)

最終講義では、非常に優れたプレゼンを行った男性である。実際、高校時代からテレビに出演したり、講演をするなどの経験を積んでおり、言葉や知識など、道具を使う力については、非常に高い自信を持っている。しかし、その説明力や道具を使う力の高さの割に、意外と自分のしたいことがはっきりつかめていないということを認識している。

こうした傾向は、最終講義の際の発表で明確に現れている。

(4) モデル講座における受講者の変化

講座の学習の過程では、質的な面でのデータを出来る限り確保できるようにした。また、終了時には、資料1に示したインタビューを行なった。その結果、各事例について、質的に意義あるデータを得ることができた。

1) A1さん(30代男性)の事例

ポートフォリオでは、再就職講座と就活講座の実践と同時に、他にどのような学習を行っているかをも記録している。

たとえば、A1さんの場合には、この半年の間に、学校の授業以外に参加したセミナ

ーや講座（この講座を除く）等の名称として、「Web アプリケーション構築講座」、この半年の間に、就活や再就職について話や相談した人の人数が「2人」、話や相談した人との関係（友人、母親、ハローワークの相談員など）として、「母、友人」といった記録がみられる。

終了時の講義では、各人の過去分析と同時に、自分の未来年表を作成し、今後の計画を具体的に説明してもらっている。A1さんの場合は、過去分析にあたって、小学校時代、中学時代、高校時代、大学、社会人になってからの自己分析（強み、弱み）を行い、未来年表としては、30代、40代、50代、60代と各年代にわたって行ないたいことを発表した。彼が過去分析でわかったことは、自分は人の役に立つことを自分の仕事にしていきたいという点であった。それは未来の仕事への展望にも活かしていきたいという。知的好奇心が強く、頑固な特性を持つが、それはまた自分の長所であることがこの講座を通じて理解できた。

こうした自己分析と未来の計画作りにおいて、eポートフォリオは大きな力となっている。行動計画を記録して実践したり、目標を置くことで自分の行動を具体化する助けとなっている。

インタビューの結果では、第一に、アドバイザーや講師からの意見を得ることで自分を客観的にみることができるようになったという、視点の変化、展望の力が付いている。

第二に、自己分析を行なうことで、自分が誰にでも平等に接するという態度や姿勢を持っており、それが信頼につながっていることがわかってきたという。

2) A2さん（20代男性）の事例

富山県外の高校時代を過ごしたA2さんの資料も準備し、すぐれたプレゼンを行っていた。彼が最近受講した講座は、「ヤングジョブ：富山で開かれたコミュニケーション講座」であり、就活や再就職の相談をしたのは3人、その人たちは、ハローワークの相談員さんや両親（父親、母親）であった。

高校時代にゴルフのプロを目指していたが、身体を悪くしてその道を諦め、県内の大手ドラッグストアに勤務していたが、リーマンショック後退職、自分が何をしたいかわからない状態が続いているという。

しかし、最近では、本講座の受講とウェブ講座を受講し、特にこの講座の受講を通じて、自分に何が足りないかわかってきたことが一番の収穫だという。まだ自分の長所がこれだとはっきり言えないが、何がわかっていなかったかわかったことによって、自分に自信ができたという。

彼の場合、ポートフォリオで読んだ本の記録を残し、またさらに多くの本を読み続けている。ゴルフを通じて得た集中力やスキルをどう使って学習していけばよいか、ポートフォリオの学習に特化した機能として効果を発揮しているという。

いわゆる「コミュニケーション能力」というものを自分は非常に持っているにもかかわらず

らず、なぜ就職できないか、その原因は、たとえ自分にコミュニケーション能力があったとしても、それはスキルであり、本当に自分がやりたいことがわかっていないという点が、面接や履歴書に現れていることを次第に理解しはじめたという。

彼の場合、単にコミュニケーションに関するコンピテンシーや道具を扱う力、そして人間関係力が高いとしても、自律的な力が十分でないことが就職に影響している。3つのコンピテンシーがバランスよく発展することの必要性をこの事例は示しているといえる。

3) A4さん(20代男性)の事例

A4さんは、見た目から内向的な印象が強い人であり、自分の過去を語る時も、人から自分の良さを指摘されてきたという。家電製品販売業にパートで従事しながら、その仕事の過程で、人の役にたつようなクリエイティブな仕事を続けたいことに最近気がついてきたという。eポートフォリオへの書き込みや過去分析を通じて、それがさらによくわかったともいう。

彼のプレゼンは、小学校時代から現在にいたるまで、極めて詳細なエピソードを語りながら、それぞれのエピソードが持つ意味を自分なりに理解していくというものであった。絵を描くことや映画を通じた英語の学習を通じて、そして仕事を通じて、忍耐力と集中力が自分の特性であることがわかってきている。短所としては、自己主張も自分の意見もちにくいこと、また人に自分を見せることが苦手である。

eポートフォリオへの書き込みも少なく、記録も人に見せるためには残していない。あくまで、自分の内面のものとして表現している。ただ、交流をいやがっているかということ、そうではなく、この講座の過程で彼は10人の人と相談を行ない、家族(父、母、兄)や友人、ハローワークの相談員とも積極的な関係を持つようになっている。

他者との関係の中で、自分を表に出すことが苦手な恥ずかしい人にとって、eポートフォリオはそれを強制するものであってはならないから、どの程度まで公開するかを自分で決定できるような機能をさらに充実する必要があるだろう。

個々の利用者には、それぞれの心理的、社会的特性があり、そうした特性に応じてまた学習のスタイルは変わっていく。わずか3人のインタビューの中でも、eポートフォリオで求められるものがいかに多様な人々の特性に応じたものかが、わかってきた。

(5) 学習や活動の自立性に関する効果

eポートフォリオを活用したことによる学習や活動の自立性への寄与について評価するため、モデル講座開始時と終了時にアンケート調査を実施した。

アンケートの質問項目は表10のとおりである。質問に対し「しようと思わない」「あまりできない」「助けがあればできる」「ひとりでできる」「人に教えることもできる」から選択することとした。

表 10 学習や活動の自立性に関するアンケートの質問項目

項目	質問
目標を立てる	行動するときは、自分なりに目標を立てて取り組む。
	目標を達成するために必要なことを考える。
	目標の達成状況を振り返る。
計画を立てて取り組む	目標を達成するための計画を立てて取り組む。
	決めた計画は守ろうと努力する。
	計画の進み具合を確認し、必要に応じて計画を見なおす。
活動に参加する	人との関係をうまく築く。
	興味がある活動にはできるだけ参加する。
	多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける。
	活動に参加し、視野を広げる。
	友達以外の、異なる世代・立場の人と会話する。
	人の意見を素直に聞く。
自分について振り返る	人のおかれた状況について振り返る。
	自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す。
	他の人に自分について伝える。
	自分の強みや弱みを把握する。
	自分の強みをいかす方法を考える。
	自分の弱みに対処する方法を考える。

受講開始・終了時のアンケートの結果を比較してグラフで示したものが図17～図20である。そのうち特に大きな向上がみられた項目を表11に示している。

実際には、ほとんどすべての項目において向上がみられていた。当然、この結果は、必ずしもeポートフォリオだけの効果ではなく、講師による講義の効果もそこには含まれる。

だが、総じてみると、まず、第1に、「人の意見に対して、自分なりの考えを持つ」という効果がある。これは、eポートフォリオの利用の過程で、担当アドバイザーや講師との意見の交換を行うことで、自分の見方以外の視点に多く接する効果が生まれている。

第2に、eポートフォリオが持つ記録の機能である。この点については、「計画の進み具合を確認し、必要に応じて計画を見なおす」、「自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す」ことの効能が、講師からも再三説明されており、そのことを受講者は十分理解した結果となっている。

第3に、自分についての理解が、学びの貯金箱や日記の記録を通じて深まっていく効果、自己理解の深化という効果である。

第4に、自律的なコンピテンシーの一つの力、自己表現である。この点については、「他の人に自分について伝える」ということがやはり、アドバイザーや講師との関係の中で向上している。それはまた、自律的なコンピテンシーのもう一つの力、計画力の向上ともつながっていく。短期目標の設定や長期目標の設定を通じて、「目標の達成状況を振り返る」、「目標を達成するための計画を立てて取り組む」力が向上している。

最後に、人間関係の力であり、課題解決の力であるが、この点についても、「多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける」、「活動に参加し、視野を広げる」、「興味がある活動にはできるだけ参加する」といった積極性が生まれている。

実際、講座が始まって、最終講義まで残った受講者はすべて、家族とあらためて対話を持ったり、友人や同僚との対話を通じて自己の見直しを図っている。同時に、他の講座にも積極的に参加している。A4さんの場合、一見本当に内気な人のように見えながら、非常に具体的な目標設定を行い、長期的な展望を持つに至っている。これは、eポートフォリオ作成の過程で、自分のことの記録と他者との対話を通じて、自分というものをよく知り、自分の強みが同時に弱みであることを知った上で、自分についてのイメージが一層明確化する効果といえよう。

表 11 学習や活動の自立性に関するアンケート結果の比較

右欄の数字(1. しようと思わない 2. あまりできない 3. 助けがあればできる
4. ひとりのできる 5. 人に教えることもできる)

Case	変化の大きかった項目	第1回	最終回
A1	多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける。	2	5
A1	人の意見に対して、自分なりの考えを持つ。	4	5
A2	他の人に自分について伝える。	2	5
A2	目標を達成するための計画を立てて取り組む。	3	5
A4	計画の進み具合を確認し、必要に応じて計画を見なおす	2	4
A4	自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す。	2	4
B3	目標を達成するための計画を立てて取り組む。	3	5
B3	興味がある活動にはできるだけ参加する。	3	5
B3	多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける。	2	5
B3	活動に参加し、視野を広げる。	3	5
B3	自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す。	3	5
B5	自分の強みや弱みを把握する。	1	3
B5	自分の強みをいかす方法を考える。	1	3
B5	自分の弱みに対処する方法を考える。	1	3
B6	目標の達成状況を振り返る。	2	4
B6	自分の強みや弱みを把握する。	2	4

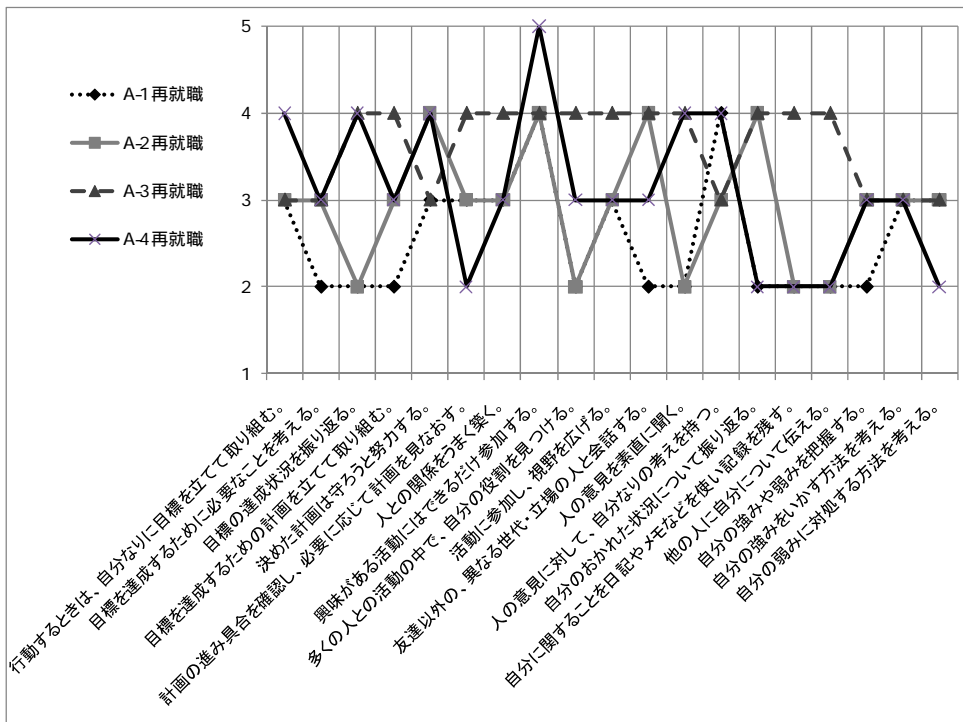


図 17 アンケート結果（再就職チャレンジ教室 講座開始時）

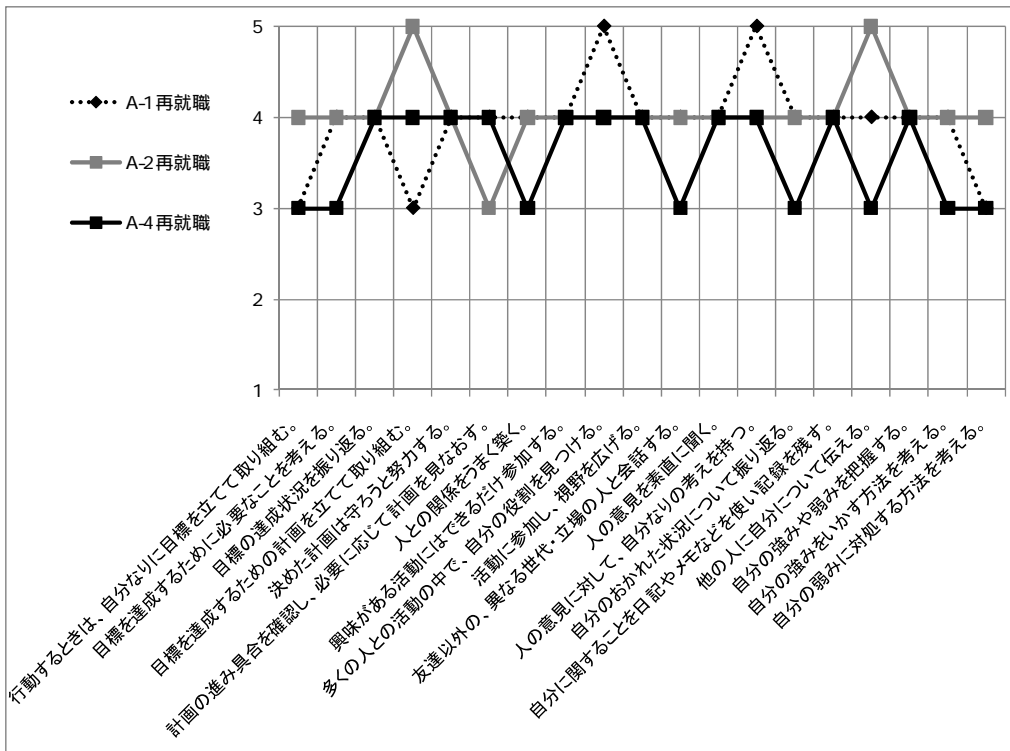


図 18 アンケート結果（再就職チャレンジ教室 講座終了時）

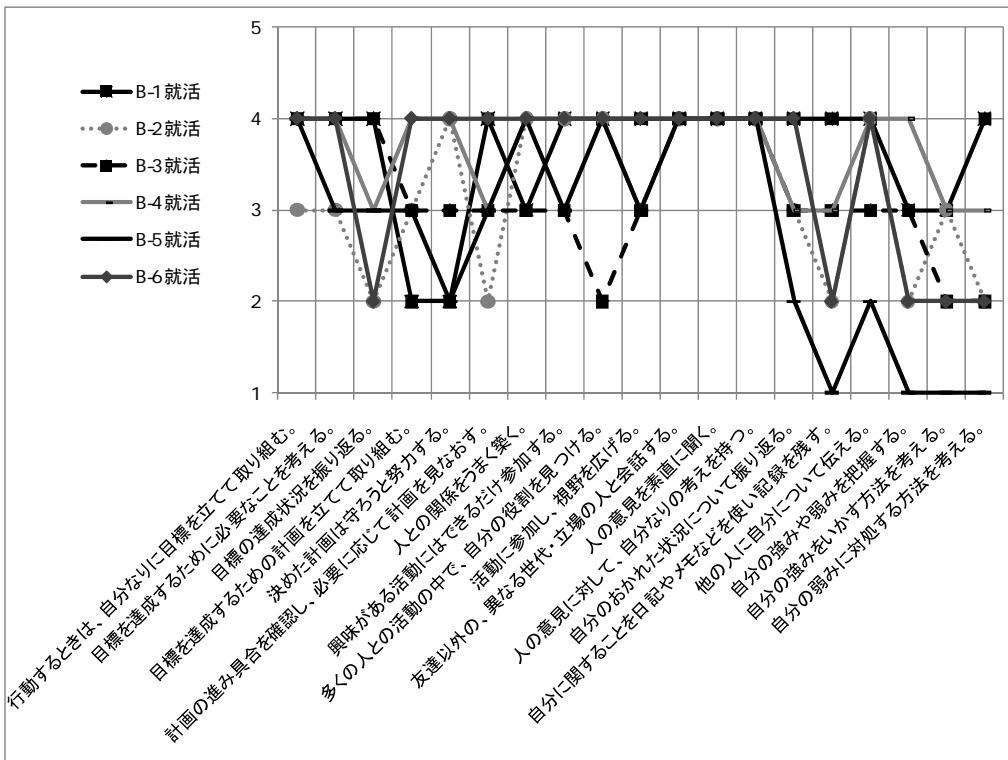


図 19 アンケート結果（就活チャレンジ教室 講座開始時）

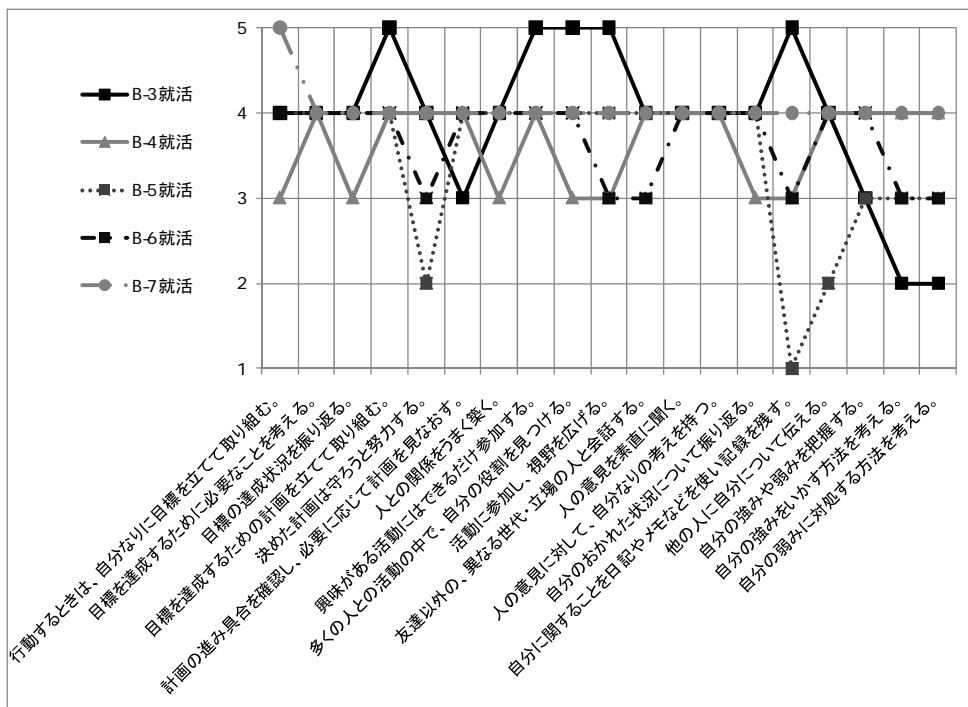


図 20 アンケート結果（就活チャレンジ教室 講座終了時）

3 - 4 実証評価におけるeポートフォリオの課題

上記の面接調査や量的な利用状況から明らかになった課題としては、特に次の4点をあげたい。

第1に、記録の習慣を持つ人とそうでない人とでは、eポートフォリオの効果が大きく変わる。こうした記録の習慣をどう形成するかは、eポートフォリオ利用にあたっての大きな問題点である。

第2に、記録の内容がそれぞれの受講者によって変わっている。これは、面接の際には、逆に内容を規定するのではなく、もっと高い自由度をもった記録ツールにさせていただきたいという要望ともなっていた。

第3に、アドバイザーの役割である。今回、この講座を通じて、講師とアドバイザーが大きな教育的効果をもたらしているが、学習者が専門化していく過程では、いっそう専門的なコーチングが行えるようなスタッフをeポートフォリオシステムとして整備していく必要がある。

最後に、発達段階に応じた柔軟なeポートフォリオの必要性である。

今回の受講者でも、高校生といったん就職していた社会人とでは、その使い方に大きな差異がみられた。特に、高校生の場合、目標設定を行なうことが自分の想像できる範囲でのことしかしようがない。より具体的な、そして長期的な目標設定の具体的な例示を含めたマニュアルが必要となる。eポートフォリオ自体も、高校生用、社会人用と発達段階に応じた使い方ができるようなものを必要とするのか、あるいは、もっと汎用性の高いものにするのか、その設計思想から考え直していく必要があるだろう。

4 eポートフォリオ活用の評価と可能性

4 - 1 eポートフォリオは学習の何を支援したか

学習者が学習へのモチベーションを高める要因は幾つかある。一つには、学習目標が明確で、学習の成果が眼に見えることだ。遙か彼方の高い目標を一変に目指すのではなく、その目標に向かっていくつかの段階を踏みながら、一步一步ステップを刻むごとく進める学習である。各ステップには到達度目標があり、コンピュータ支援学習の中では達成出来れば報奨（KR情報）が与えられるものもある。逆に達成できなければ、どこがまずかったかを分析し、より優しいアプローチを促すチュートリアルを行うのである。このように、自分で自分の学習が目標に対してどの程度進んだかを実感できることは、学習の意欲付に効果が高いことが知られている。

eポートフォリオシステムの目標設定機能は、長期の目標と短期の目標設定が可能で、短期的には達成目標が到達可能なものに、そしてその短期目標の何ステップ後に、長期目標としてのゴールを設定するのが望ましい。

しかしながら、自分で、個々のステップごとに達成度を評価し、その分析の結果、新たな目標設定を行えるのは、現実にはかなりしっかりした学習の目標管理ができる能力の持ち主である。多くの場合、思うように自己管理できない。ここで求められるのが、eメンターの役割である。eメンターは学習者の学習状況をチェックし、時に指導や助言を行い、時に悩みの相談にのることがある。本システムでのアドバイザー支援機能がこれに当たる。eメンターは、アドバイザー支援機能を用いて、担当する学習者の最新の学習状況と活動記録などを見て、学習の進捗状況を把握し、学習への助言を行うのである。

今回の実証実験においては、再就職のためのチャレンジ教室と就活のためのチャレンジ教室がその対象とされた。ここでの学習は、講師による指導、学習者の自己学習、eメンターによる学習支援と、約2ヶ月間の間、講師の学習管理のもとに学習者の自己学習とeポートフォリオの活用が進められた。特に講座の最初に自己分析をテーマに学習が行われたことで、eポートフォリオのキー・コンピテンシー自己チェックやeポートフォリオによる振り返りに対するモチベーションを高めることができた。限られた2ヶ月ではあったが、4回の対面学習とその間のeラーニングによる自己学習、日々の記録とeメンターとのやり取りからeポートフォリオの可能性が見取れた。

具体的なeポートフォリオの効果、すなわちeポートフォリオを活用することで、学習者の学習にどのような行動変容が見られたかについては、この後の章で詳述するので、ここでは概略をまとめておく。

1) 振り返りの効果による主体的な学習

学習者の最初と最後のコンピテンシーの変化の中で、最初は低かったが、最後に高くな

った割合が顕著な項目として、「目標を達成するために計画を立てて取り組む」「計画の進み具合を確認し、必要に応じて計画を見直す」「自分に関することを日記やメモなどを使い記録に残す」など、日々の記録とその振り返りから計画の進捗具合を評価、改善しようとする態度の変容が見られた。受動的学習ではなく、自ら目標を持って、目標管理のもとに主体的な学習をすすめるための学習支援としてeポートフォリオの可能性が認められた。

2) eメンターによるアドバイスで学習の継続へ

自己学習におけるモチベーションの維持には、他者からのコメント励ましが効果的だ。eポートフォリオのアドバイザー支援機能で、eポートフォリオに慣れない学習者も次第に記録を残すようになる。また記録に対する励ましのコメントで、さらなる学習への意欲が高まり学習の継続へとつながった。eメンターとの信頼関係が強まるに連れ、eポートフォリオを介しての自己分析や目標設定の相談も多くなり、学習の継続性や意欲付に効果があった。

3) 学びの関係性支援

今回の実証実験では、講師とeメンターとの関係の中での学習であった。しかし、学習は学習者同士の情報交換や励まし合いという、学習者の共同体の中でより効果的に進むという研究もある。既存のインターネット市民塾システムのSNS機能がその役割を担い、eポートフォリオとの連動の中で、学習者の学習への意欲付や継続的学習が期待できる。

4) 相手に合わせた自己アピール

eポートフォリオには、活動の記録と共に、記録された活動の中から、企業等が求める項目で自己アピールのためのデータを抽出し再加工することが可能になっている。記憶に頼って書く履歴書ではなく、過去の学習や活動の事実が文字データのみならず写真などととも再現されることで、自己アピールの内容と質の向上が期待される。ジョブ・カードとの連携で就職活動への活用も高められる。

4 - 2 高校生のキャリア教育における可能性

高等学校進学率が98%に達し、高等学校が国民教育機関の性格をもちはじめている現在、高等学校でのキャリア教育は、卒業時点だけでなくその後の人生を見通したものとなることが望ましいといえる。ニート・フリーターの増加が社会問題となり、キャリア教育の重要性が言われて久しい。キャリア教育の成果指標として、高卒や大卒のいわゆる無職無業率（進学も就職もしていない者の卒業者に占める比率 文部科学省 平成22年3月学校基本調査）をあげてみよう。

- ・高等学校卒業者の無職無業率は、全国で5.6%であり、大都市部では10%前後の都府県もある。
- ・大学卒業者の無職無業率は、全国で16.1%にのぼっている。

こうした地域間や校種間の格差を是正し、事態の改善を図るためには、高校生段階までに、人生設計をもとにした職業観を身につけ、人生の各時期に意欲と見通しをもって職業選択するため、一人一人を適切にサポートすることが大切である。

今回のeポートフォリオは、従来からの課題に応え、今後のキャリア教育の課題を解決するために、2つの可能性が示されたと考える。

(1) 一人一人に対応し、交流を進めるキャリア教育の可能性

高校教育におけるキャリア教育は、各高校の生徒の実態や地域の要望に基づいて、進路指導の一環として3年間のメニューが計画されていることが多い。主として以下の3つを通じて行われる。

- ・課題研究（専門学科）や総合的な学習の時間（普通科など）またホームルーム活動や学年活動などの特別活動では、体験や調査研究を通じて職業観を養い、発表を通じて知識と専門性を養う。
- ・インターンシップによる職場体験は、望ましい職業観や勤労意識を養う際に有効である。現在、専門学科、普通科を問わず年々増加している。
- ・放課後等における面接指導は、具体的な就職先や進学先をめざして行われ、コミュニケーション能力の育成とともに、進路意識の向上、高校段階における知の総合化を図っている。

近年、多くの企業が求めているのがコミュニケーション能力や協調性、主体性である。高等学校の普通科では、面接指導などで個別の対応は、進路選択に必要な生徒が中心であり、全員の能力の育成は今後の課題といえる。

コミュニケーション能力は、まず、相手に共感的に内容を伝えようという意欲が大切であり、小さな成功体験を積み重ねることで、自己を向上させるモチベーションを高め、結果的に自らの発声や抑揚、表情や態度、内容や構成などが改善されるものである。そのため、個別の面接指導が大切であるが、教員のみでは対応できないことから、これまで

も地域人材の活用などさまざまな工夫が試みられている。

今回のeポートフォリオの長所は、教員も参加することで、生徒がeンター等とのスクーリングなどからアドバイスを受け、成功体験を重ねることでモチベーションを高め、コミュニケーション能力の向上に大きな改善が期待できるなど、学校側の指導のもとで、計画的に外部人材を生かすことができる点である。

表 12 自己評価の向上（終了時と開始時の学習・活動に対するセルフアセスメント項目の差の平均）

		全員 平均	再就職者 平均	就活者 平均
1	行動するときは、自分なりに目標を立てて取り組む。	-0.1	0.0	-0.3
2	目標を達成するために必要なことを考える。	0.6	1.0	0.3
3	目標の達成状況を振り返る。	1.0	1.3	0.8
4	目標を達成するための計画を立てて取り組む。	1.0	1.3	0.8
5	決めた計画は守ろうと努力する。	0.1	0.3	0.0
6	計画の進み具合を確認し、必要に応じて計画を見なおす。	0.7	1.0	0.5
7	人との関係をうまく築く。	0.3	0.7	0.0
8	興味がある活動にはできるだけ参加する。	0.3	-0.3	0.8
9	多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける。	1.1	2.0	0.5
10	活動に参加し、視野を広げる。	0.7	1.0	0.5
11	友達以外の、異なる世代・立場の人と会話する。	0.1	0.7	-0.3
12	人の意見を素直に聞く。	0.6	1.3	0.0
13	人の意見に対して、自分なりの考えを持つ。	0.3	0.7	0.0
14	自分のおかれた状況について振り返る。	0.9	1.0	0.8
15	自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す。	1.3	2.0	0.8
16	他の人に自分について伝える。	1.0	2.0	0.3
17	自分の強みや弱みを把握する。	1.1	1.3	1.0
18	自分の強みをいかす方法を考える。	0.9	0.7	1.0
19	自分の弱みに対処する方法を考える。	0.9	0.7	1.0
	全体平均値 (第1回の平均値)	0.7	1.0 (2.9)	0.4 (3.3)

表 12 は、今回の参加者の学習・活動に対するセルフアセスメント項目について、各人の第1回と第4回の差を平均したものである。全体平均で向上が見られ、再就職者平均は、就活者平均を大きく上回っている。

就活者としてあげられる富山県の高校生の自己評価の向上が比較的少なかった理由を3点から整理した。

上級学校進学を目指す普通科2年生生徒であり、切迫感がやや少なかったこと。

学業と部活動のためネット利用の機会や時間が少なく、期間中の書き込みなども少なかったこと。

第1回の平均値については、再就職者よりももともと高かったこと。などである。

富山県は、高卒時の無職無業者の比率が全国最低（文部科学省平成 22 年度学校基本調査 1.6%）であり、中学の「14 歳の挑戦」（全中学 2 年生が 5 日間職場体験）、高等学校のインターンシップ（全高校生の 6 割以上体験）、高校 3 年間の計画的進路指導など、さまざまな進路指導が機能していることなども背景として考えられる。

高校生の利用についての、今後の改善点は、まずは、ネット活用の機会を増やすことがあげられる。高校生自らが書き込み、交流することで活動が活発化し、そのことを通じて、再就職者の向上値が特に高い項目「9 多くの人との活動の中で、自分の役割を見つける。」「15 自分に関することを日記やメモなどを使い記録を残す。」「16 他の人に自分について伝える。」などについても、評価を高めることが期待できる。

(2) eポートフォリオの継続によるキャリア意識向上の可能性

一般的に、高卒就職者の 3 年後の離職率が全国平均で約 5 割にのぼると言われている。また、この項の冒頭にあげたように、大学卒業時の無職無業率は大変高い。こうしたことから、高卒後も人生の各時期において、適切な支援を受けることが大切になっている。その時々アドバイザーを求めることも大切であるが、機会自体のミスマッチが避けられない。

今回の eポートフォリオの大きな特徴は、参加した高校生が今後、登録を継続することで、進学、就職した後も支援できる仕様となっている点である。人生の各時期における進路選択において、自分の過去の知的、人的な資産を振り返り、後々までも活用できることは、継続的なキャリア意識の向上の可能性が期待でき、大きな意味を持つと考える。

4 - 3 就業力向上における可能性

昨今、就職率の低下、再就職の難易度の上昇など就職することの厳しさが叫ばれている。特に新卒学生においては顕著で、12月1日時点で内定率は68.8%と96年以降過去最低の内定率となっている。しかしその一方で複数の内定を獲得し、どの企業に入ろうかということ頭を悩ましている学生もいる。その差はいったい何であろうか？

日本経団連が毎年出している「選考時に重視する要素」では2010年の調査において1位：コミュニケーション能力、2位：主体性、3位：協調性を挙げている。これはほぼ毎年変わっていない。いつの時代においてもコミュニケーション能力や主体性、協調性を求められている。ではそのコミュニケーション能力や主体性、協調性とはいったい何であろうか？

面接の場面で、面接官と受験者は初めて顔を合わせるが多い。限られた時間の中で、受験者は自分のことを話し、面接官は受験者がどういう人間かを引き出す。受験者が入社した場合、自社で活躍をしてくれるであろうか、また自社のタイプにあっているだろうかということ限られた時間で判定している。そこで重要になるのがコミュニケーション能力である。コミュニケーション能力がなければ、そもそも相手のことが理解できない。これが毎年企業が強く求めていることでもあるといえる。限られた時間で、受験者は面接官に対してしっかりとアピールする。それが伝わり自社にふさわしいと思ってもらえれば採用となる。しかしどれだけコミュニケーション能力が長けていたとしても、自分のことをそもそもしっかりと説明できなければ面接官は評価をしてくれない。自分のことをしっかりと理解することがベースとして必要になってくる。また2位の主体性も例年ほぼその位置に属し、企業にとって必要な要素とされている。主体的に行動するとは、人から指図されて行動をするのではなく、自分で必要だと思う行動を考え、自ら飛び込んでいくことである。つまり能動的に行動することを指している。更に企業が期待しているのは、自分で目標を立てそれに向かって突き進むような力である。社会においては常に試練や壁が付きまとう。それを自分で考え、時には上司の力を借りて乗り越えていくことが必要である。そのためには主体的に物事を考え、行動する能動的な力が必要となる。3位の協調性も同じである。集団生活において、周りの方とやり取りをしながら、違う方向を向いているものをうまくお互いに舵取りをしながら進めていくことが必要である。方向性が間違っていれば議論をしていくことも必要である。普段自分の意見をぶつけ合うという経験をしていないため、社会に出てから苦労する部分である。それを企業は求めている。

就活で必要とされる力として常に上位にあるこの3つの力。このように就業した際に必要な力のため、常に上位に位置している。企業において、1人で働くわけではなく、いろいろな人との係わり合いで仕事は成り立っている。コミュニケーションをとりながら、周り

と協調して物事を進めて行く必要がある。また自ら考え、自ら行動することが企業における経済活動コストを抑え、効率よく業務を進めさせる。上位 3 つの力がすべて就業において必要な力といえる。これは再就職も同様である。

このことから 3 つの力を鍛えることで就活や再就職、ひいては就業においても有利になるといっても過言ではない。その 3 つの力を鍛える良いきっかけが、「eポートフォリオ」である。

今回 4 回に渡り、就活、再就職向けの講座を開催した。eポートフォリオを用いながら、自分を知り、目標を設定して主体的に行動し、仲間と議論しあうことを実施。まさに就業上で必要とされる力を鍛えるものであった。

さて計 4 回を通して、就業に必要な力を得られたのか？それは eポートフォリオを用い、eメンターが支援することで、就業に必要な力を鍛えたまではいかないまでも、鍛える刺激になったといえる。当初誰も eポートフォリオを用いなかったのが、回数を重ねること、また eメンターからのフォローにより少しずつ eポートフォリオに書き始める。自分の目標に対して eメンターからコメントをもらうことで、やる気が出て、また次なる目標を設定する。目標を達成した際、メンターから同様にコメントをもらえるため、それが楽しさとなり継続していく。最初はやらされ感からスタートしたが、回を重ねていく上で主体的に行動するようになっていく。eポートフォリオに記載されていることから、常に意識をするためか、行動が変わってくる。心理学で言うカラーバス効果のように意識するからこそ、自分自身の成長を実感できていく。それにより自分を知ることができ、更に主体的に行動することが出来る。これらの eポートフォリオを踏まえて、リアルの場での講座では、参加者同士議論を行う。これも当初はお互い恥ずかしがって、まったく話をしていなかったのが、回を重ねていくうちに打ち解けていきお互い議論を活発に交わすようになっていく。自分の意見をぶつけていくことで協調性を刺激しているといっても過言ではない。

最初はやらされ感からのスタートであるかもしれないが、周りからのフォローによって、主体的に目標を立てそれを達成する喜びを感じ始めると、好スパイラルに入っていく。eメンターから見られているという部分や、自分が行動したことに対するコメントをつくることが高揚感を生み出している。それをモチベーションに次なる行動をとっている。こういった動きが就業に必要な力を刺激していく。

就業に必要な力を鍛える刺激になる eポートフォリオ。キャリア教育においてどのような可能性があるだろうか？学校教育において学ぶ科目においては、社会において必ずしも必要なスキルになりにくい。数学の微分積分が営業に役立つわけではない。しかし考え方

を変えれば就業時に必要なスキルになりうる。例えば、長時間集中して勉強するという行為は、業務における集中力を鍛えるし、数学を学ぶことが論理力を鍛えることになる。これらの考え方を変える行為はすぐに成果に繋がるものではなく、また必要か不必要かが分からない。そこにeポートフォリオを用いて、常に意識して鍛えていくことが将来役立つと伝えるべきである。またeメンターと目標設定して自分の強みを伸ばしていく仕組みが必要である。このような形が出来ると、企業に必要とされる人材が育成できていき、キャリア理論を教えていなくても、自分自身でキャリアを形成していく動きが取れるようになってくる。そのためには、社会というのがどういうもので、どういう力が求められ、普段の生活でどうやって鍛えられるのかを伝えるとともに、eポートフォリオを用いて自分自身を成長させていくような動きを取れるサポート体制が必要となるだろう。eポートフォリオを用い、就業に必要な力を明確にし、行動させていくことが出来ていけば立派なキャリア教育を学校の先生と連携して行うことができるであろう。また、学生の就職活動にとどまらず、離転職における再就職活動において、企業従業員のキャリア形成、定年後の人生を考えるにあたって、活用の幅が広まり、今後楽しみなものである。

最後に、このeポートフォリオには、いろいろな取り組みがされているが、注目したい取り組みとして2つ取り上げておこう。

一つは、前にも少し触れたが、eメンターやキャリア・コンサルタントを介在させている点である。実際のジョブ・カード発券に至るには、登録ジョブカードコンサルタントの介在や対面によるキャリアコンサルティングが必要ということもある。しかしながら、ジョブ・カード発券に至るまでの経過を、eポートフォリオを使って行うことにより、コンサルティングの時間の短縮など効率性、eメンターを含めた複数の違う視点からの支援という相乗効果も期待できると思われる。

一つは、日々の活動、学びの記録をもとにeポートフォリオにインプットした情報を履歴書やジョブ・カードへアウトプットするという一連の流れを体系的にかつ、使いやすいものにしようとする試みである。

この検証実験では、受講者の視点、取り組みの経緯の見える化、出力帳票へのスムーズな移行という点で、改善すべき点も見受けられたが、eポートフォリオにおけるデータの蓄積と検証は、学生のキャリア形成作業、就職活動、離転職、再就職時にも活用できる一連の体系的、かつ簡便なツールとして有用であると思われる。

ぜひ、受講者目線、活用のしやすさを念頭に改良を加え、誰でも取り組みやすく継続性のあるeポートフォリオとして、学生の就職活動時だけでなく、再就職時や生涯にわたる個人のキャリア形成作業においても有用な支援ツールとして完成されることを期待したい。

4 - 4 企業からみた評価と可能性

(1) ジョブ・カード制度とは

ジョブ・カード制度は、正社員経験の少ない求職者などが、登録キャリア・コンサルタントの支援を受けて職務履歴や教育訓練歴、資格取得などの情報をまとめて「ジョブ・カード」に記載することにより、自らの職業の能力を客観的かつ具体的に提示し、企業とのマッチングを促進するものである。

ジョブ・カード制度では、正社員の経験が少ない求職者などに対して、企業での実習（OJT）と教育訓練機関等での座学（OFF - JT）を組み合わせた「有期実習型」などの職業訓練（職業能力形成プログラム）を提供しているほか、主に新規学卒者を対象とした「実践型人材養成システム」では、若年者、特に新規学卒者に計画的な訓練を行うことにより、現場の中核的人材の育成を目指している。

求職者は、企業や教育訓練機関等で実務経験を積むことによって職業能力を修得し、企業による評価を得て就職活動に活用できる。国が日本商工会議所へ委託して平成 20 年度から開始した「ジョブ・カード制度普及促進事業」では、全国で 2,500 社以上で訓練が実施され、約 4,700 人が訓練を修了。うち約 3,400 人が正社員になるなど（いずれも H22.10.4 現在）、非正規労働者の正規雇用課の促進に大きく貢献している。

(2) ジョブ・カード記載情報の特徴

ジョブ・カードは、上記にあるとおり求職者の職務履歴や教育訓練、資格取得などの情報を記載したものだが、その際に登録キャリア・コンサルタントの支援を受けながら、自らの職の能力を客観的かつ具体的に提示したものにする必要がある。そうでなければ、企業は正しくその履歴を評価できないばかりか、ジョブ・カード制度そのものの信頼性を損なうからである。

また、登録キャリア・コンサルタントの支援を受ける意義は、求職者が受けた訓練履歴の振り返りと合わせて、求職者がこれまでに参加し実践してきた様々な活動そのものと、活動に参加して得られた成果を確認できることである。登録キャリア・コンサルタントの助言により、自分自身をたな卸しすることで、求職者自身が気づいていない成果を確認するができ、それをジョブ・カードに記載することができる。

企業は各種の資格取得や訓練受講履歴を重視することは当然としても、いわゆる履歴書には記載されることが少ないこうした成果を知ることができるメリットは大きいのである。

(3) ジョブ・カードとeポートフォリオの違い

ジョブ・カードでは、多くの場合、求職者が求職の相談窓口を訪ねた時、ようやくジョブ・カードの作成がスタートする。そして、登録キャリア・コンサルタントの支援を受けて、これまでの自身を振り返り、その成果をジョブ・カードにまとめることになる。

しかし、この手順は言ってみれば後追いである。求職を思い立ったときに、はじめてこれまでの自分を一気に振り返ることになる。

しかし、eポートフォリオを使う場合、自身を振り返る期間はもっと短く、ごく最近のことである。この点でジョブ・カードとは大きく異なり、重要な点と言える。

ジョブ・カードの場合、振り返りの期間が過去に長い分、取り組んできた訓練などの事実を確認できたとしても、そのことが求職する自分にとって有効であったかどうかを、途中で客観的に評価される機会が少なく、仮にあまり有効でない取り組みがあった場合の軌道修正が図られずに求職の場面を迎えることになり、その後の選択肢が狭くなる。

これに対して、eポートフォリオはeメンターの支援を受けつつも、短期間の振り返りにより、反省や軌道修正、自身への勇気付けなどが行うことが可能である。

また、eポートフォリオの活用により、eポートフォリオの多様性を高め、関係支援機関と協力体制を構築していくことは極めて意義あることと考える。

(4) ジョブ・カードとeポートフォリオとの連携の可能性

eポートフォリオとジョブ・カードとの連携を考えると、eポートフォリオはデジタルの記録特性があることから、ジョブ・カードもデジタル化されれば、双方のメリットをさらに有効に活用できると考えられる。

ジョブ・カードのICカード化などへの対応については、ICカード化については、まずは活用にあたっての課題や問題点を抽出し、実用可能性を探ることが先決と考え、平成20年度はICカード化に向けた調査・研究を実施することを検討していた。ICカード化の実現のためには、ジョブ・カードが相当普及した段階で、ニーズが顕在化することが必要条件となるとの見解が、ジョブ・カード事業を担当する厚生労働省職業能力開発局から示されている。

よりも の要件をクリアできなければ、ジョブ・カードのICカード化は難しいとの印象であり、この点ではeポートフォリオの記録のうち、必要項目やデータをIC型ジョブ・カードにコピーして「eジョブ・カード」が作成されるという連携はまだまだ時間を要するものと考えられる。

しかし、双方の活用目的や方法においては親和性の高い関係と言え、今後もデジタルでの連携をより進めるための研究は重要であると考ええる。

(5) 今後の課題と可能性

企業が求職者に提出を求める応募書類として圧倒的に多いのが履歴書であり、今後もこの傾向は続くものと考えられる。しかし、求職者からは履歴書だけに留まらず、職歴書や職務経歴書など、名称はいろいろあるものの、履歴書を補うものを合わせて提出している。これらは、企業にとっても興味のある

本人情報であることには違いないが、もう一つ、情報に広がりや欲しいところである。

その職務を経験することで、人間的にどう成長したのか。何を考えるようになったのか。こうした情報は、これまで履歴書には当然記載することはなく、また、企業側もそこまでの情報を求めてこなかった。しかし、eポートフォリオの仕組みが確立されて、社会が履歴書の情報に限らず、eポートフォリオに記録されるこれまでの学習や社会活動などの記録も個々人の要素に加えられるようになれば、企業側の採用も、現時点の評価要素に加えて、求職者の現在に至るまでの経緯も合わせて見ることになり、視点が大きく変わっていくのではないかと考えるのである。

4 - 5 生涯学習の事業推進における可能性（1）

生涯学習の成果の評価について、これまでは、例えば、富山県民生涯学習カレッジが、大学や市町村等と連携し、講座等の履修時間に基づいて県民カレッジ単位数を累積している。しかし

- | | |
|-----------------------|----------------|
| ・履修内容について記録するものではないこと | 記録量の課題 |
| ・習得内容について評価するものではないこと | 評価者の課題 |
| ・成果が学習メニュー改善に資していないこと | 事業改善の課題 |
- など、多くの課題があった。

今回のeポートフォリオの取り組みでは、これまでの課題の多くを解決する可能性が示されたと考える。

(1) 記録量の課題については、これまで紙媒体であったため、紙面上の配列などの制約が大きく、記述量の増大に伴って、枚数が増えるなど、可搬性に大きな制約があった。この点について、WEBサイトを利用することで、制限がほぼ無くなる。

(2) 評価者の課題については、WEB上でIDとPWを設定することで、個人情報の保護のもとで、適切な情報範囲をeメンター等の開示し、助言を行うというコントロールが可能となったことで、大きな前進があった。習得内容について、eメンターによる評価とアドバイス、これに基づく自己の成長についての自己評価などによって、評価者が明確になったことがあげられる。

(3) 事業改善の課題については、個人情報を保護した上で、履修・習得内容と学習履歴、成果をもとに、適切な事業改善の貴重な資料が得られることなどである。

今後の課題と可能性

今後の課題は、このeポートフォリオシステムを活用し、多くの人数で実践する方法の確立である。そのためには、2つの成長モデルを検討する必要があると考える。

・コミュニティは20人を超えると発言が難しくなると言われる。また、一方で長年にわたる固定的な人間集団はさまざまな弊害を生みやすい。以上のことから、eメンターやアドバイザー数名と、十数名の利用者といった人的なシステムを、その時々フレキシブルに組織する場と方法論が必要であろう。

・また、現在のところ、受講者は、eメンターやアドバイザーとのみつながっている。受講者同士や講座経験者が、準メンターや準アドバイザーとして、相互に助言しあうことが望ましい。以上のことから、このシステムの利用者のうちから、eメンターやアドバイザーになるサブシステムを用意することが必要だろう。

以上、今回のeポートフォリオシステムは、学校教育段階から卒業後の人生にわたって、生涯学習の縦軸、横軸に広がる展開の端緒についたばかりであり、システムや方法の面で、今後いっそうの成果が期待できると考える。

4 - 6 生涯学習の成果の評価における可能性

(1) 「eポートフォリオ」の潜在力

現在の文部科学省、都道府県、市町村など自治体において様々な生涯学習推進施策が行われている。2011年2月から第6期の中央教育審議会がスタートし、3月からは生涯学習分科会の議論も始まろうとしている。その中でも、20年来の『宿題』となっている評価の問題を「eポートフォリオ」は解決できる可能性を秘めている。

(2) 評価ができない？

自治体の生涯学習推進施策は、1990年の生涯学習振興法から、スタートしたが、当時は「生涯学習」という言葉を一般化するために、生涯学習をすることがいいこと、奨励をすることが中心で、市民の自由な「生涯学習」を評価することは良くないとする意見もあった。しかしながら、社会構造の変化、行財政の変化、悪化につれて、税金を投入した生涯学習施策も「アウトプット」を求められるようになってきた。

「成果」が問われるようになってきた。あるいは生涯学習の投資効果、波及効果がようやく現実の問題として顕在化しはじめたのが現在の状況だろう。生涯学習推進の拠点施設である公民館、図書館、博物館、生涯学習推進センターの事業、プログラムは、講座アンケートの実施レベルの確認作業にとどまっているところが大半である。個人の要望に応える、個人のライフヒストリーを確認しながらすすめていく発想が欠けていた側面がある。

講座参加の「スタンプラリー」方式の奨励、評価、顕彰は1990年代前半から「富山県民カレッジ」などで先導的に実施されていた。また、学習成果の接続の視点から「県民カレッジ方式」が文部省生涯学習局（当時）を中心に、公民館（入門講座）生涯学習推進センター、大学（応用、専門講座）という流れを示したが、その受け渡しは一部の地域を除いては、進まなかった。

(3) 評価の客観性 指標 ベンチマーク

公民館等の現場では、その事業についての評価が、参加人数を中心に行われ、個別の受講者の「伸び」については、個人にゆだねられていた。個人の学習活動の総和が、自治体生涯学習推進の成果である点が見逃されてきた。

ようやく教育基本法改正により、「教育振興基本計画」が明示され、各自治体の生涯学習推進を計画的にすすめる必要から、各自治体の生涯学習推進計画の更新が行われている。その中で、今後の課題として、個人の生涯学習を支援する立場から、その進捗状況を確認するための「学習管理ツール」が必要となってきた。これが「eポートフォリオ」である。

eポートフォリオは、個の学習と自己評価に有効な「学習管理ツール」であると同時に、評価の客観性を示す指標・ベンチマークとしても有効な「学習管理ツール」となり得る。

(4) 学習支援者の使えるツールとして

「学習管理ツール」としての「eポートフォリオ」について、その概念は、残念ながらほとんど自治体の生涯学習部門には、浸透していない。公民館等の生涯学習推進の現場には、専門職としての社会教育主事の数が増え、指定管理者制度の導入により、民間企業、NPO等が社会教育施設の運営を行っているところも増えてきた。生涯学習推進の現場に「eポートフォリオ」とは何かを衆知する必要がある。そのためには、「eポートフォリオ」が学習支援者、学習支援機関にとって役に立つ、使えるツールとしての理解が大切であり、ICTの活用の観点からの「eポートフォリオ」を、それぞれの現場の職員に使ってもらうことを求めたい。研修機会に、生涯学習推進にかかわる職員、スタッフに、自己のキャリア形成に役に立つことを経験してもらうように誘導するのが大切である。「eポートフォリオ」が使えない人（使った経験のない人）に、使ってもらうことにより、必要性を理解していただき、地域での学習活動（ボランティア活動を含めて）に活かしてもらうようなプロモーションが大事である。

5 今後に向けて

5 - 1 eポートフォリオシステム機能の拡充

(1) データが蓄積されてこそそのeポートフォリオシステム

これまでに述べてきているとおり、eポートフォリオシステムの意義は大きいとは言うまでもないし、本事業においてもその効果は実証されている。しかしながら、細かく利用状況等を見てみると、なかなか全ての項目を、項目ごとに入力するというには至っていない。「ポートフォリオ」のもともとの意味にはさまざまな説があるが、どの説にもある程度共通なものとしては「紙ばさみ」であり、投資家が個々に保有している株式や債権を一切合切放りこむことができる入れ替え自由なバインダーのようなイメージである。教育における「ポートフォリオ」も同様に考えると、学習者自身が学習活動を通じて創りだすデータ、学習者の活動によって創りだされるデータをできるだけ集めたものと考えべきだろう。データが入力されないeポートフォリオは、なにも資料が挟まれていないただの「紙ばさみ」になってしまう。

今回の実証評価を通じた利用状況からいえることは、eポートフォリオへのデータ入力は、実証評価が大変短期間であった割には一定の記録があったと言えるが、これはモデル講座の学習の過程にeポートフォリオの記録を組み込んで学習設計したことと、講師やeメンター等が記録を促したことの効果による。

学習者は学習活動を通じてさまざまなプロダクトを産出していく。それらのある程度自動的にeポートフォリオとして記録できるような仕組みが必要だと考える。具体的には、e-Learningを併用した学習であれば、LMSに学習の記録が残る。学習の過程で講師やアドバイザーともコミュニケーションを図っており、その中にも気付きや学びがある。この点、今回開発したシステムは、インターネット市民塾システムと高い親和性が生れるよう実装されている。

大学のポートフォリオ記録が、卒業後、インターネット市民塾システムに引き継がれ、これらのデータが連動して管理できるようになれば、よりたくさんのデータが集められることになり、ばらばらのファイルやプリント、メモを見るだけでは気付かなかったことを気づくことができるようになる可能性が高いと考える。

また、利用者の多くは、SNSやTwitterといったソーシャルメディアを利用し、コミュニケーションを行っていることも多い。これらのつづやきの一つ一つは他愛のないことであったとしても、これらが蓄積され、時間軸やその他の出来事とリンクして見直すことで、これらの情報もeポートフォリオデータのひとつとして利用が可能となる。

予定表の情報も重要なデータになると考える。GoogleカレンダーなどはAPIが公開されており、これらを利用してうまくスケジュールデータを連動したり、蓄積されたデータを閲覧する際に、カレンダーをベースに資料が整理されたりすると、より効果的に、過去の

自分の取り組みを振り返ることができるだけでなく、それを踏まえてこれからの予定、より具体的な目標設定も行うことが可能になると考える。

これ以外にもさまざまな情報システムを利用している場合が考えられ、それらとシームレスなデータ連携ができる仕組みを作り上げていくことが必要である。

(2) 蓄積されたデータを整理して見せる方法

eポートフォリオは蓄積するだけでは意味がなく、そこに蓄積されたデータをどう整理して、新たな知見が得られるようなデータに変えていくかも重要である。

データ整理の方法は大きく分けると、カテゴリー、あいうえお順、大小、マッピング、時系列といった5つほどしかない。カテゴリーはカテゴリーを設定する段階で複雑に分類することをしているように見えるが、実際にはカテゴリーという方法を利用しているに過ぎない。eポートフォリオに蓄積されたデータを、いろいろな方法で整理して見せる方法を考えることが必要であろう。

今回のシステムは、蓄積されたデータを自動的に整理するというところより、具体的にこのような形で見せることでどのような効果が期待できるかということの検証が先にあり、そのため、入力項目、内容等を制限し、予め用意されたデータベースに登録する方法をとり、システム側で情報を整理させる部分の機能は弱い。

この部分は非常に難しく、言語処理技術や知的処理システムが必要となるが、とりあえず入力されたデータを、データの内容に関わらず時系列に整理して表示したり、携帯電話のGPS機能などを用いて入力場所等の情報が得られれば、Google Mapの上にマッピングして表示するなどの機能も、使い方によっては面白い効果が出てくる可能性もある。

入力データには、利用者自身が作成するものの他に、利用者に関わる人からのコメント等も利用できる。これらの管理については、個人情報保護や著作権の問題に関わる可能性もあるため慎重に進める必要があるが、これらも重要なeポートフォリオデータであることに間違いはない。同一のeポートフォリオシステム、eポートフォリオシステムにリンクしたシステムから連携して引き出されるデータであれば、利用できる可能性も高いと考える。

(3) システムの汎用化と普及方法

現在、高等教育機関を中心に、ポートフォリオ導入の検討が始まっている。システム開発企業のいくつかでは、商品パッケージを販売するところも出始めている。これらの機能にはさまざまな独自性がみられるが、データ連携やAPIの公開などが不十分なものが多い。各システムの独自性を高め、ユーザの囲い込みをしやすくすることを考えると仕方ないことかもしれないが、全国的に実施するのであれば、少なくともデータ連携や他システムへのデータ移行の部分は共通化を行っておく必要があると考える。

現在のところ、今回のシステムのような、生涯学習というゆるやかな学び、個々人のコ

ンピテンシーの伸長の支援を目的とするeポートフォリオシステムについて、IMSによる標準化の動きを鑑みながら、本事業の成果が2章で述べられているような様々なポートフォリオ標準化の動きと連動し、日本発の「生涯学習分野における学びのeポートフォリオ標準化」に寄与することを期待したい。

5 - 2 地域の協力体制のあり方と活用の社会的評価のしくみづくり

(1) 学習者と地域・社会の接点として

今回の取り組みでは、モデル講座での実践的な活用を試行し、自立的な学習への効果や教育的効果など、学習者側に目を向けた評価を行いその有効性を検証することができた。同時に、eポートフォリオによる学習のプロセスや成果の見える化は、学習者のみならずこれを支援する学校教育、生涯学習、就業支援等の立場にとっても新たな支援の可能性を生むことが分かった。

例えば、学校教育では社会との継続的な接点を持ったキャリア教育に役立ち、生涯学習では学習成果のベンチマーク的な評価の可能性を生み、就業支援ではジョブ・カードとの連携や企業の採用基準に新たな情報源をもたらす可能性が出てきた。

このように、eポートフォリオは学習者と学習支援者や企業、地域・社会との接点としても重要であるが、その記録をどのように受け入れ活用するかは、それぞれの立場から効果や課題を今後具体的に検証していく必要がある。

(2) 社会的評価の仕組みとして

社会的評価のしくみづくりは、日本版NVQの取り組みや学習提供者の質的保障についてさまざまに検討が始まっている。今回の実証評価では、学習の質的な成果は学習提供者によってのみ決まるのではなく、eメンター、アドバイザー等による支援体制によって強く影響を受けることが明らかとなっている。また、eポートフォリオの記録から、学習者の振り返りや自己分析および目標設定等に、自らの積み重ねをどの程度明らかにしたかが、学習の成果に関わっていることが読み取れる。このように学習の質保障は、学習提供者、支援者、さらに学習者のナラティブな学習（経験等を物語的に捉える学習）の状況を合わせた結果として評価される性質があり、その共通の情報としてeポートフォリオの内容が問われることになる。

(3) 地域の活用体制の構築に向けて

次年度は、これらの課題をふまえ、学校教育、社会教育・生涯学習機関、地域の企業や商工会議所等の参加をさらに広め、学習者との接点としてどのような活用が可能か実践的に評価する取り組みを進めたい。ジョブ・カードとの連携や生涯学習パスポートとしての活用の可能性、企業の採用者から見た情報活用、それらの情報の認証の可能性について検証していくことが期待される。その過程では、認証基準の統一化と多様化の矛盾や、本人からの積極的な情報公開（ショーケース）と情報保護の矛盾、地域体制と地域外との矛盾など、さまざまな課題が明らかになると予想されるが、すべての課題を一挙に解消するのではなく、実現可能なことから実証していく取り組みも大切と考える。

このような取り組みにより、学習の積み重ねが地域の中で生かされるための支援のネッ

トワーク構築を目指したい。

執筆者分担 (五十音順)

		(担当章・節)
川合 紀子	有限会社ステップアップ代表取締役 (キャリアコンサルタント)	4 - 3
木下 晶	富山県教育委員会生涯学習・文化財室長	4 - 5
黒田 卓	富山大学人間発達科学部教授	5 - 1
近藤 真司	(財)全日本社会教育連合会「社会教育」編集長	4 - 6
柵 富雄	NPO法人地域学習プラットフォーム理事長 富山インターネット市民塾推進協議会事務局長	1 - 1 ~ 1 - 4 3 - 2、5 - 2
杉本 圭優	(株)インテックシステム研究所 社会システム研究室研究員	2 - 2、3 3
立田 慶裕	国立教育政策研究所生涯学習研究部統括研究官	2 - 4 3 - 3、3 - 4
富田 光國	富山商工会議所企画総務部長	4 - 4
中野 裕司	熊本大学総合情報基盤センター教授	2 - 1 ~ 2 - 3
長井 亮	(株)アールナイン代表(モデル講座講師)	4 - 3
山西 潤一	富山インターネット市民塾推進協議会理事長 富山大学人間発達科学部教授	4 - 1